

山梨県韮崎市  
能見城跡

送電線鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

韮崎市教育委員会  
韮崎市遺跡調査会  
東京電力株式会社山梨支店

山梨県韋崎市  
能見城跡

送電線鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

韋崎市教育委員会  
韋崎市遺跡調査会  
東京電力株式会社山梨支店

## 序 文

市を代表する景勝地七里岩の台地上は、坂井遺跡をはじめとして原始・古代以来遺跡が豊富に形成された歴史のある土地柄となっています。坂井遺跡周辺ではこれまでに民間会社の工場・駐車場等の開発事業に係わり坂井南遺跡が発掘調査され、豊富な文化財が相次いで発見されています。また、中世においては、武田勝頼の築城による新府城が有名であり、現在城跡は国により史跡に指定されています。能見城跡は『甲斐国志』以来この新府城の外郭として位置づけられており、無計画な開発によりその一部が破壊されましたたが、七里岩を横断する土塁などは部分的に残っており、往時が偲ばれます。

今回の能見城跡発掘調査は東京電力の送電線建設にともない、平成九年度に調査が実施され、面積的には小規模なものでしたが、城郭の帯郭の一部が発見されました。詳細は本報告書の本文以降に譲りますが、遺跡から発見されたものは当時の生活や文化を知る上で貴重なものとなっています。発掘調査によって得られた資料は、文化財として永く後世に伝えて行かなければならないものです。本報告書が中世城郭研究の史料になればと願っております。

最後ですが、遺跡発掘調査並びに報告書作成に關係して、多大なる御理解と御協力を賜った関係諸機関及び関係者の皆様方に深く感謝を申し上げる次第です。

平成一〇年六月三〇日

韭崎市遺跡調査会 会長 秋山 幸一  
韭崎市教育委員会 教育長 口野 道男

## 例 言

一 本書は、山梨県韮崎市穴山町字能見城三八〇八番地ほかに所在した能見城跡の発掘調査報告書である。

二 発掘調査は、東京電力株式会社の送電線鉄塔建設工事に伴い行われた。

三 遺跡の名称は、小字名を採用した。

四 発掘調査は、東京電力株式会社山梨支店から委託を受け韮崎市遺跡調査会が実施した。調査組織は別に示すとおりである。

五 整理作業及び報告書作成にかかる業務は韮崎市遺跡調査会が実施し、報告書の編集・執筆は山下孝司が行つた。

六 第五章特論「天正壬午の乱・信長死後の旧武田領争奪戦について」は平山優氏（山梨県史編さん室）に玉稿を賜つた。

七 遺構並びに城跡の測量は、株式会社バスコに委託した。

八 凡例

① 遺構の名称は発掘調査現場において付けたものである。② 縮尺は各構造図ごとに示した。③ 遺構断面図の水系標高（m）は数字で示した。

九 発掘調査及び報告書作成に当たつては、多くの方々から御指導・御協力・御鞭撻をいただいた。一々御芳名を上げることは避けるが厚く御礼を申し上げる次第である。

一〇 発掘調査、整理によつてもたらされた資料は、韮崎市教育委員会において保管している。

## 調査組織

一 調査主体 韮崎市遺跡調査会

二 調査担当 山下孝司・閑間俊明（韮崎市教育委員会社会教育課）  
伊藤正彦（試掘）・秋山圭子（整理）（韮崎市遺跡調査会）

三 調査参加者（会）

岡本嘉一・小沢高恵・小沢千代子・小沢治代・小沢久江・小田切昭

子・岡本保枝・志村冴子・五味ゆき子・小沢栄子・乙黒きくゑ・大柴欣子・保坂美香子

四 事務局（韮崎市教育委員会社会教育課）

教育長 口野道男、課長 山本雄次、課長補佐 深沢義文、係長  
藤巻明雄、野口文香・水上和樹

# 目次

序文  
次回目次  
写真図版目次

|                          |   |
|--------------------------|---|
| 第一章 発掘調査の経緯と概要           | 1 |
| 一 発掘調査に至る経緯              |   |
| 二 発掘調査の概要                |   |
| 第二章 遺跡の立地と環境             | 1 |
| 一 遺跡の立地                  |   |
| 二 周辺の遺跡                  |   |
| 三 歴史的環境                  |   |
| 第三章 遺構                   | 1 |
| 第四章 能見城跡測量成果             | 1 |
| 第五章 特論                   | 1 |
| 天正壬午の乱—信長死後の旧武田領争奪戦について— |   |
| 第六章 まとめ                  | 1 |

## 挿図目次

|                      |    |
|----------------------|----|
| 第1図 能見城跡①と周辺の遺跡      | 2  |
| 第2図 能見城跡（調査地区）位置図    | 3  |
| 第3図 能見城跡調査区域全体図      | 6  |
| 第4図 下段テラス平・断面図       | 7  |
| 第5図 能見城と新府城          | 9  |
| 第6図 能見城防壁概要図         | 10 |
| 第7図 能見城跡現況写真         | 12 |
| 第8図 能見城跡測量図          | 13 |
| 第9図 天正壬午の乱関連城郭と地域概況図 | 39 |

## 写真図版目次

|   |  |
|---|--|
| 国版1 調査前風景、作業風景                              |  |
| 国版2 測量風景、発掘風景                               |  |
| 国版3 上段テラス、下段テラス                             |  |
| 国版4 上段テラスB1,B土層、下段テラスA1,A土層                 |  |
| 国版5 下段テラスB1,B土層、下段テラスC1,C土層<br>下段テラスつぶて石（？） |  |
| 国版6 諸国古城之図・新府城跡、能見城跡空中写真                    |  |

# 第一章 発掘調査の経緯と概要

## 一 発掘調査にいたる経緯

平成九年二月に東京電力株式会社山梨支店より送電線（穴山線No.22、No.33）鉄塔建替工事に関して、韮崎市教育委員会に埋蔵文化財の有無確認依頼が出された。これにより市教育委員会では同年三月に現地調査と遺跡の有無確認の調査を実施した。その結果を踏まえて、本市教育委員会と会社側で協議を行い、周知の埋蔵文化財包蔵地内にある山22に関し、遺跡名を能見城跡、調査主体を韮崎市遺跡調査会として、工事に先立つて鉄塔建設予定地約150m<sup>2</sup>を対象として発掘調査を行い、記録に留め永く後世に伝えることとした。

## 二 発掘調査の概要

発掘調査期間 平成九年八月二二日～平成九年九月三〇日

調査地は山林であり、樹木の伐採後表土を重機によりはがし、ローム土層面で遺構の確認作業を行った。基本的に調査区域はほぼ二〇四方の範囲であり、調査区域内は上下二段の平坦地があり、平坦地ごとに堀り下げを行った。測量には任意に杭を設定したが、全体図は写真測量によつて実施した。

## 第二章 遺跡の立地と環境

### 一 遺跡の立地

能見城跡は、山梨県韮崎市穴山町字能見城地内に所在する。

韮崎市は、山梨県の北西部に位置し、甲府盆地の北西端を占めている。

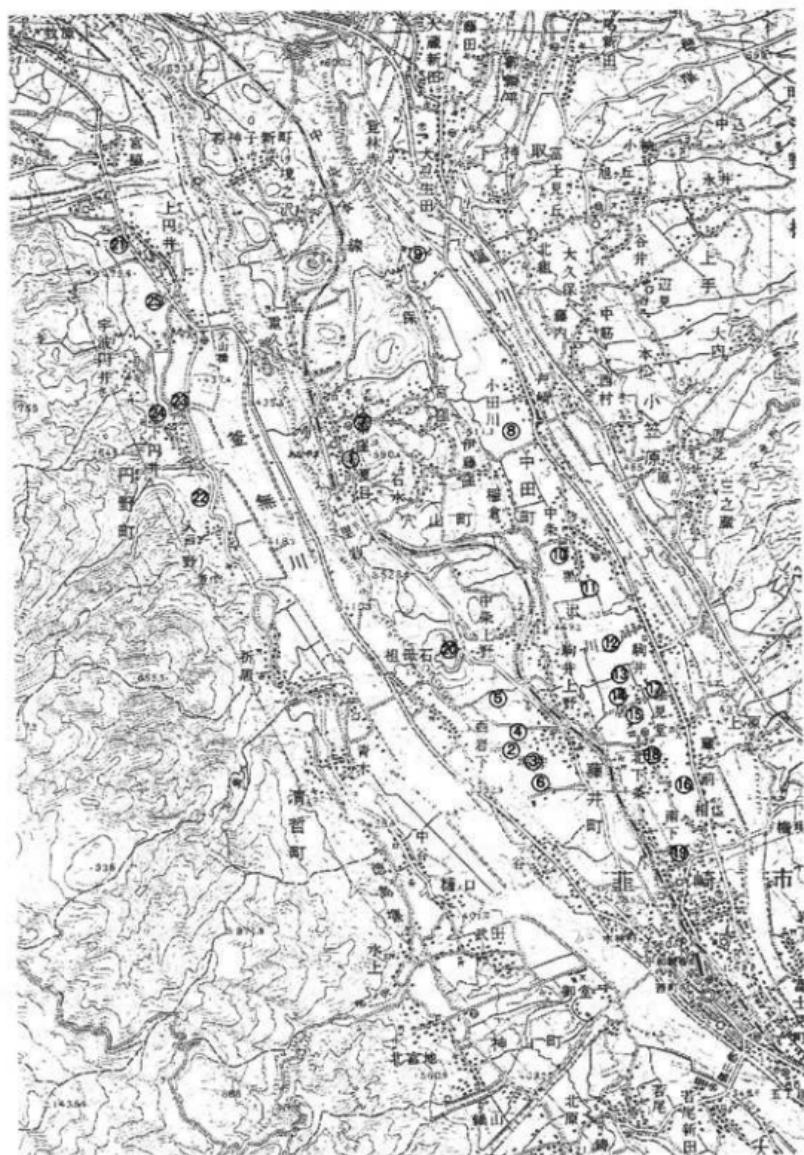
市内を貫流する釜無川・塩川により、地形的には山地・台地・平地の三区域に分けられる。

台地である七里岩は、八ヶ岳の山体崩壊とともになう韮崎岩屑流と東西を流れる塩川と富士川（釜無川）によって形成されている。西側を流れる富士川（釜無川）による台地の浸食は激しく、その浸食崖が長野県下萬木から韮崎に至つており奇観を呈し七里岩の呼称のおこりとなつてゐる。富士川（釜無川）は水量は多いが川幅がひろく普段は流れが緩やかであるが、一度集中豪雨が降ると南アルプス前山の山々から土石流が多量に流れ込み氾濫により大水害を起こすこと度々であった。台地東側は塩川の氾濫原で肥沃な平地をつくりだしており、中田町・藤井町を含む藤井平は穀倉地帯として古く「藤井五千石」と呼ばれていた。台地上には韮崎岩屑流によつてつくりだされた小円頂丘と凹みが所々にあり湧水地が点在し、畑と果樹園が多い田園地帯となつてゐる。

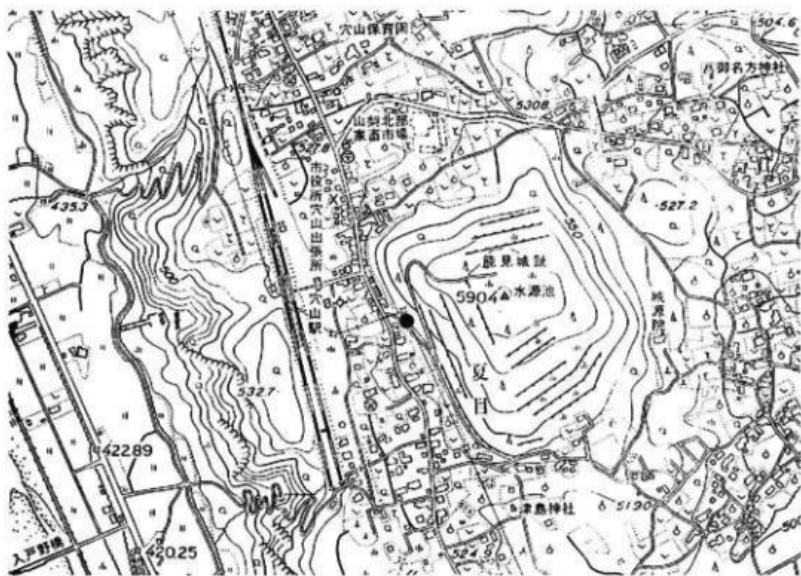
七里岩台地上は、湧水地を中心として現在の集落や古代の遺跡が展開する傾向があり、小円頂丘は中世の城郭に利用されている。能見城はJR中央線穴山駅東側、県道17号線（七里岩ライン）の東側の円頂丘に築かれた城郭で、今回の調査では西側の山裾部分の標高約540mにおいて発掘が行われた（第2図）。

### 二 周辺の遺跡（第1図）

本遺跡①の周辺にある発掘調査された遺跡としては、七里岩台地上では興文時代中期を代表する坂井遺跡②が著名であり、今回の送電線鉄塔建替工事にともなう事前調査によつて、坂井遺跡のなかで村ノ前地区③・茅林地区④・天神前地区⑤の三箇所が発掘されている。村ノ前地区では



第1図 熊見捕跡のと周辺の遺跡 (1/50000)



第2図 能見城跡（調査地区）位置図 (1/10000)

縄文時代中期の土坑が発見され、茅林地区では弥生時代の方形周溝墓、天神前地区では縄文時代前期の竪穴住居址や古墳時代の前期の住居址が発見されている。坂井遺跡に隣接した坂井南遺跡⑥は古墳時代前期の大集落である。能見城跡北側の宿戻遺跡⑦は縄文時代・平安時代の遺跡となっている。中世城郭としては能見城とかかわりの深い武田勝頼築城の新府城跡（国指定史跡）⑧がある。

七里岩台地下東側の藤井平においては、縄文時代晚期の粗痕土器が出士した中道遺跡⑨、縄文時代と奈良・平安時代の上本田遺跡⑩、奈良・平安時代を主体とした中田小学校遺跡⑪、平安時代中心の前田遺跡⑫、瓦塔が出土し仏堂（集落内寺院）の発見された宮ノ前第2遺跡⑬、弥生時代前期の水田跡の発見や四百軒以上の奈良・平安時代住居址が発掘された宮ノ前遺跡⑭、縄文時代中期曾利II～V期の環状集落の一部や奈良・平安時代の住居址などが発見された北後田遺跡⑮、縄文時代中期の特殊な配石遺構や堀之内・加曾利B式期の土器とともに特異な形態の中空土偶が発見された後田遺跡⑯、弥生時代後期の集落跡の下横屋遺跡⑰、漆紙文書の発見された宮ノ前第3遺跡⑱、古墳時代後期の住居址が発見された後田第2遺跡⑲、縄文時代中期初頭の焼人骨の埋められた土坑が発見された山影遺跡⑲などがある。

釜無川右岸では、縄文時代・平安時代の竪穴住居址や中世の地下式土坑が発見された北堂地遺跡⑳、瓦塔の破片が出土した平安時代の半縄田遺跡㉑、市内ではじめて八稜鏡の出土した水無遺跡㉒、弥生・奈良・平安時代の二反田遺跡㉓、縄文時代前期から断続的に営まれ、平安時代においても集落が形成された石之坪遺跡㉔などがある。

天正九年（一五八一）、武田勝頼は普請奉行に真田昌幸を任せ、領国経営の中心となる新しい城の築造にとりかかる。新城は華麗の地につくられ、工事は二月一日から始まり、同年九月には一応完成する。新しい城は新府中垂崎城、略して新府城と呼ばれる。勝頼が甲府の源義ヶ崎館からこの新府城に移ったのは年も押し詰まつた一二月二十四日であった。新府城築城に際しては穴山の伊東雅・次第座・石水に家臣団の屋敷を配したとされ、現在穴山町の各集落には屋敷跡と思われる土塁が散見する。

織田信長・徳川家康・北条氏政といった強敵に対して防御態勢の強化を図る勝頼ではあったが、時既に遅く、翌天正一〇年（一五八二）になると木曾福島城主木曾義昌の離反をきっかけに徳川・織田軍の侵攻がはじまり、同年三月二日徳仁科盛信の守備する高遠城が落城すると、翌三日には自ら新府城に火を放ち城を棄て郡内岩殿城を目指す。しかし追撃の手は止まず、ついに退廻り、三月一日大和村田野において勝頼以下家族・臣下は自刃し武田氏は滅亡する。

武田氏滅亡後、信長は穴山氏の河内領を除き甲斐国領主に河尻秀隆を任命するが、六月二日信長が明智光秀によって本能寺に討たれると、国内では新領主河尻秀隆が一揆により殺され混戦状態に陥る。無領主状態となつた甲斐国は北条氏と徳川氏の争奪の対象となり戦場となる。

この戦いはその千支をもつて、天正壬午の戦い（天正壬午の乱）と呼ばれる。上野をまわって信濃に入り甲斐国めざし南下してくる北条氏直に対し、先に甲府に入った徳川家康が迎え撃つ形で戦いが行われた。

七月家康は諏訪方面に兵を繰り出し諏訪高島城を攻めるが、圧倒的大軍

を擁する氏直軍の進攻を前にして八月六日には新府城まで撤退を余儀なくされた。北条勢は逃げる徳川軍を追い須玉の若神子城に布陣。これに對して一〇日家康は甲府から本陣を新府城へ移した。双方の對陣のなか、一二日には御坂峠を越えて北条氏忠の軍が侵攻してくるが、反対に甲府に留まつていた徳川勢に御坂町黒駒において撃退されてしまう。この黒駒の戦い後は小競り合いにとどまり、二か月半に及ぶ對陣の後氏直は家康に和議を申し入れ、一〇月二九日北条勢は退却することになる。結果、甲斐国は徳川氏の領有するところとなり、戦後処理を済ませた家康は、一二月二二日に甲府を出発している。

ところで『甲斐國志』には「新府中ノ墟……穴山ハ外郭ノ内ナリ能見城ト云ウ孤山高爽ニシテ四望開ケ看櫓ヲ置ベシ……某西北ヨリ東ノ方黒駒ノ内ヘ係り旧壁アリ」（巻之四十七古跡部第十）と記され、能見城は江戸時代において新府城の外郭として認識されており、このとらえ方は新府城に際してその外郭として能見城防壁が築かれたものと理解するもので現在でも根強く支持されている。しかし、能見城防壁の東端部分は堂ヶ坂砦と呼ばれ、天正壬午の戦いにおいて氏直軍が布陣した若神子城に對して家康が設けたとされており、この戦いで当然能見城・能見城防壁が使用されたことは想像に難くない。

能見城防壁は新府城外郭として勝頼により築造されたものなのか、天正壬午の戦いに際して家康が新たに築いたものなのか、勝頼の遺跡を家康が修築・利用したものなのか、現況では判然としていないと言えるが、ともあれ、新府城並びに能見城防壁は、天正九年（一五八一）年に限られた構築・使用された遺構であり、歴史を物語る大きな遺産となつてゐる。

## 第三章 遺構

調査区域は鉄塔設置区画約二m×二mの一五〇<sup>m</sup>で、地表面観察では東と西に上下二段のテラス（平坦地）があり、城郭の帯郭に相当するものとして発掘した。結果、下段テラスから帶郭の一部分が発見された。（第3・4図参照）

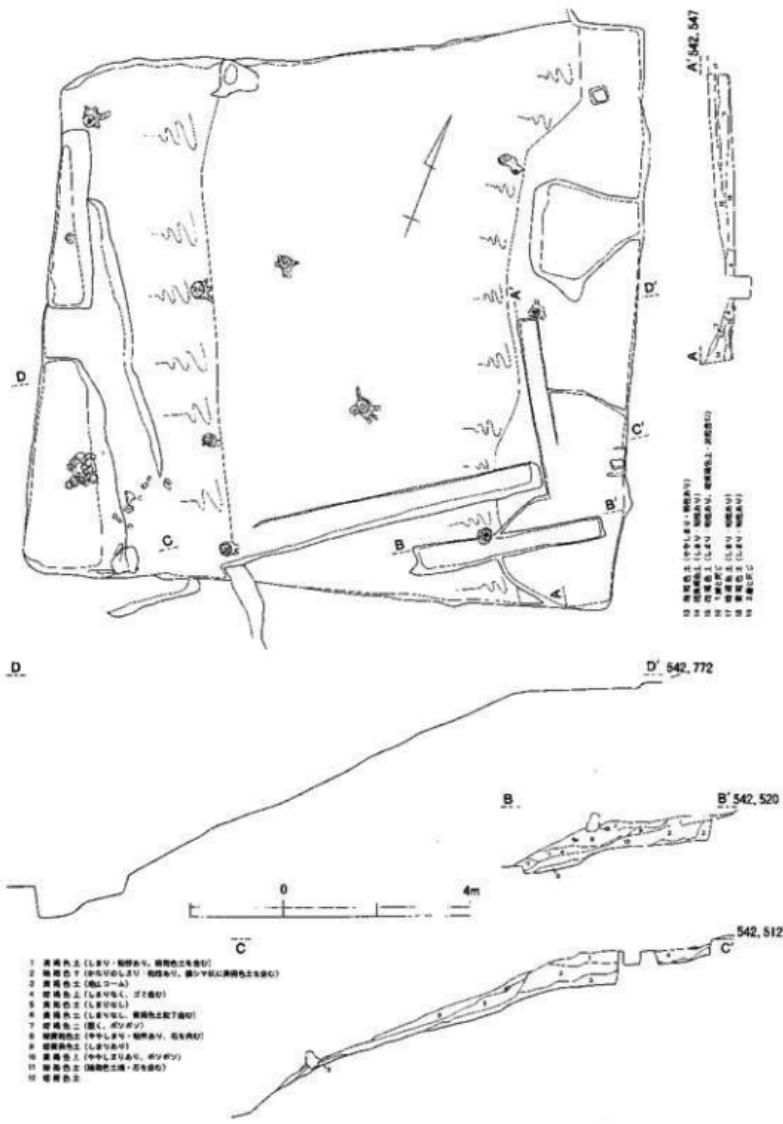
なお、遺構確認のため任意に補助的に試掘溝を設定し、隨時掘り下げを行い、地山の確認とその上の土層の堆積状況の観察も行った。斜面においては、黄褐色土・暗褐色土のしまりのない土層があり、その下に堅く締まりのある暗褐色土とローム土層がある。斜面の角度はおよそ三〇度ある。

### 〈上段テラス〉（第3図参照）

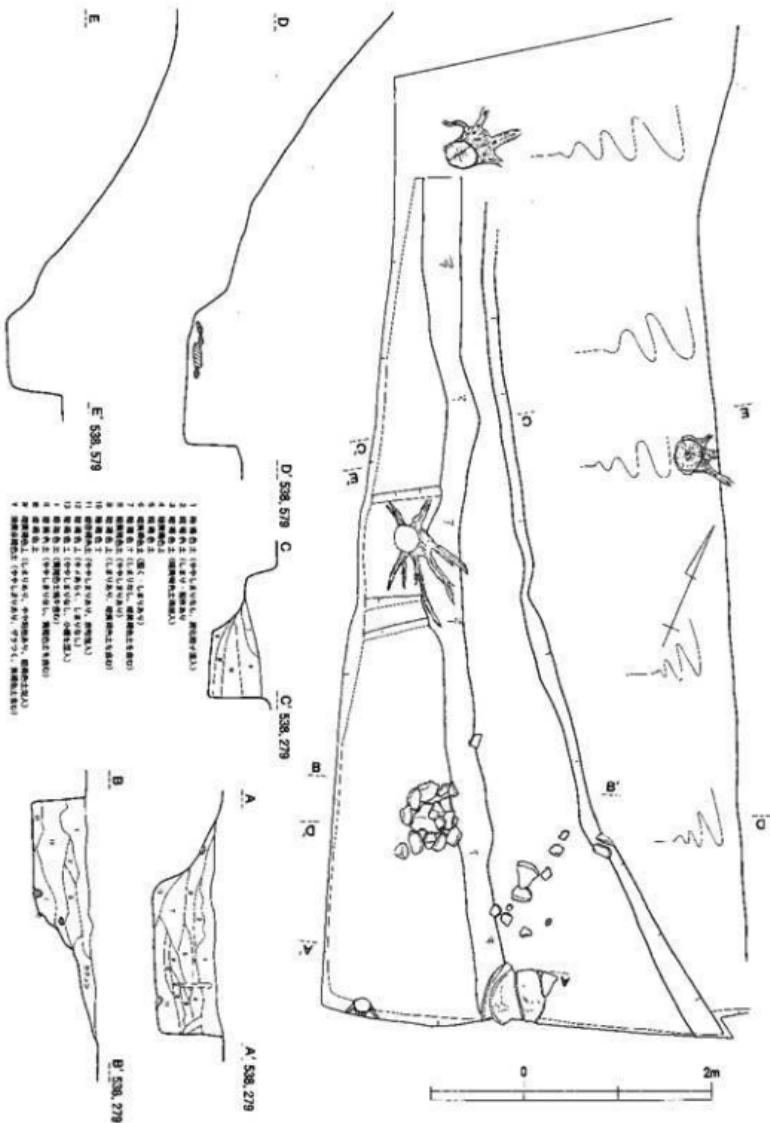
調査区域東側部分。上段テラスは南北方面に細長い約四m程の平坦地で、調査区域部分では西側の約三m幅を掘り下げた。当該地域は地目は山林ではあるがかつては畠であったという。東側（山側）斜面の地山からテラスにかけて掘り下げを行った。当初地表面直下の土層からは黒褐色の腐食土に混ざってゴミが出て来たが、さらに掘り下げた結果、地山ローム土層が人為的に斜面から直に削り下げる現象が見られた。深さは深い所で約六〇<sup>m</sup>以上あり、立ち上がりが明らかになつた。底は平坦で調査区域外に続いている。帯郭の一部分と思われる。時期や遺構の性格を決めるような遺物の出土はなかつた。一部平石を中心に一七個程の石の集中箇所がみられたが、それらの石は長さ一〇<sup>m</sup>～三〇<sup>m</sup>のもので二〇<sup>m</sup>前後代のものが多かつた。静岡県山中城では本丸西堀から三七八個の「つぶて石」が出土しておりそれらの平均的な長さは一九<sup>m</sup>であり（『史跡山中城跡』II 三島市教育委員会 一九九四年）、量的な違いはあるものの或いは、本石群も「つぶて石」の類いかもしれない。

### 〈下段テラス〉（第4図）

調査区域西側に位置する。下段テラスも南北方面に細長い約四m程の平坦地で、調査区域部分では東側の約一〇m幅を掘り下げた。当該地域は地目は山林ではあるがかつては畠であったという。東側（山側）斜面の地山からテラスにかけて掘り下げを行つた。当初地表面直下の土層からは黒褐色の腐食土に混ざってゴミが出て来たが、さらに掘り下げた結果、地山ローム土層が人為的に斜面から直に削り下げる現象が見られた。深さは深い所で約六〇<sup>m</sup>以上あり、立ち上がりが明らかになつた。底は平坦で調査区域外に続いている。帯郭の一部分と思われる。時期や遺構の性格を決めるような遺物の出土はなかつた。一部平石を中心に一七個程の石の集中箇所がみられたが、それらの石は長さ一〇<sup>m</sup>～三〇<sup>m</sup>のもので二〇<sup>m</sup>前後代のものが多かつた。静岡県山中城では本丸西堀から三七八個の「つぶて石」が出土してお



第3図 能見城跡調査区域全体図 (1/120)



第4図 下段テラス平・断面図 (1/40)

## 第四章 能見城跡測量成果

今回は発掘調査と並行して、能見城跡の測量調査も行った。

能見城は「甲斐国志」に「新府中ノ城……穴山ハ外郭ノ内ナリ能見城ト云フ狐山高夷ニシテ四望開ケ看樓ヲ置ベシ……其西北ヨリ東ノ方黒駒社ノ内ヘ係り旧墳アリ」（卷之四十七古跡部第十）とあり、江戸時代において新府城の外郭として認識されていた（第5図参照）。この「甲斐国志」の記述はその後の能見城の性格を決定付けたと言つてよく、今まで通説的に理解されている。しかしながら、城郭そのものの遺構の把握は具体的には行われていなかつた。

このような状況のなか、第二次世界大戦敗戦後の高度経済成長最中の昭和三十年代（一九五五～一九六四）に城跡には大規模な開発工事が入り、山頂を中心とする山腹は階段状に造成されてしまった。この工事は宅地造成であったが、結果として工事は中断し宅地化とはならず、城跡を破壊したのみで、無形画・無責任な開発が批判され文化財の保護が叫ばれるに至つた。

その後、この時の工事により能見城のほとんどが破壊されたという認識は広く巷間に流布するが、山櫓を取り巻く土塁と空堀の遺構が能見城の「能見城防壁」特集「能見城と文化財保護」「山梨考古」第三号（一九〇〇年）という名称が与えられ、遺構の全体的な把握がなされた。このようななか、山下孝司は能見城防壁の現況遺構を踏査し、地

表面観察により城郭の構造を検討し、その築造経緯を探るなどして、能見城防壁の歴史的位置付けを試みた（「中世甲斐国における城郭の歴史的立地—能見城防壁を例として—」『戦国大名武田氏』名著出版一九九一年）。山下の論考は室伏氏の研究の延長線上にあるもので、室伏氏の現地踏査成果に機りながら純粋研究の手法を用いて、現状の遺構と城郭構造を把握したものであつた。これにより能見城跡は具体的な遺構が掌握されることになったと言える（第6図）。

今回は右のような経緯により把握された能見城の遺構に関して、能見城防壁の中心部分となる穴山町字能見城の山の測量を実施した。測量は実機による航空写真（第7図）によつて行い、茂みなどの障害物により遺構の把握が困難な箇所や遺構の細かな表現は現地補測によつて図面を作成し、その素図をもとに現地において山梨県埋蔵文化財センターの八卷与志夫氏の指導・助言を受け完成させた。

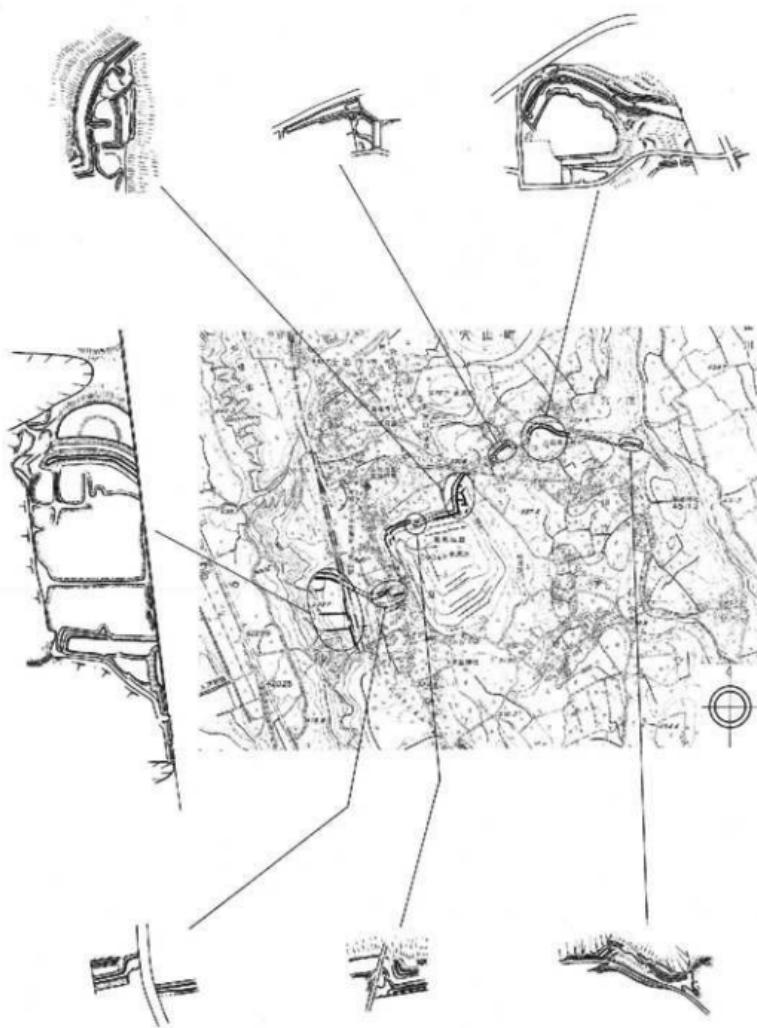
能見城防壁の遺構は、「甲斐国志」以外では広島市立図書館浅野文庫「諸国古城之図」のうちの「新府城之図」（図版6・以下「繪図」と称する）が土塁や堀などの状況をよく伝えており、ほかに山梨市の浦泉寺所蔵の「武田家持城図」（甲州新府）や東北大学狩野文庫の「甲州新府図」にも七里岩を横断する土塁の表現が見られる。また昭和二三年（一九四八年）米軍撮影の航空写真（図版6・以下「写真」と称する）は、乱開発される以前の能見城の様子が理解される貴重な資料と言える。以下、これら資料を随時引きながら、測量図（第8図）に基づいて遺構を概観していく。

城跡西側を南北に走る県道を挟んで土塁がある。これは絵図によれば

## 新府要図



第5図 能見城と新府城（山下孝司「武田家復権を賭けた新府築城」  
萩原三雄編『戦国武将武田信玄』新人物往来社1988年より）



第6図 能見城防壁概要図（太線は土壁、破線は推定線、他は帯郭・空堀等を表わす）

道につくられた桟形虎口にあたり、写真では既に人家が建てられており往時の形状を知り得なくなっている。県道西側は幅広の土壁(①)が鉤の手にあり、北側に深い空堀(②)がある、測量では土壁敷は一〇mを測る。県道東側の土壁(③)はほぼまっすぐに城跡にのびているが、南側に家があり本来の土壁敷がわからない。土壁を挟んで北側と人家のある南側では南が高く五〇mの比高差がある。この東側土壁は城跡山裾へぶつかり消えてしまっているが、絵図では直角に曲がり北方にのびる土壁が描かれている。方向的には今回の調査区域(④)にのびており、絵図には郭・堀の表現はないが、発見された帶郭へとつながるものと思われる。写真では西側山腹は上二段に平坦地が見られ、下段は細く今回発見された遺構がその一部ということになろう。現状では上段の平坦地(⑤)は明瞭にあり、下段は調査区域から北側に幅約一mの平坦地(⑥)として残っている。

城跡北側は、絵図によれば南側からのびた土壁が直角に東に曲がりそ

こから堀がはじまり土壁とともに東側方面へ山腹をめぐっており、中央部分には土壁に埋まれた桟形風の施設があり、その東側では土壁に折れを持たせている。西側からはじまる堀は現況では幅五m程の平坦地(⑦)となつておらず、その一段上の山腹には幅八m長さ六五mの平坦地(⑧)がある。上段平坦地の東端には、道により破壊され遺構が明瞭ではないが、推定で土壁に埋まれた五m四方の絵図に描かれた桟形風の施設(⑨)がある。西端からの平坦地はここで「」字形に屈折して一段高くなりながら土壁に挟まれた状態で東へ向かう。その先は絵図にみる土壁の折れの場所であり写真には山跡へ凹んだ墨線が映っているが、現況では大きな崩落場所となつておらず遺構はわからない。崩落箇所を越えると直徑三mの円形の凹み(⑩)がある。この凹みを境に西側は浅い堀状であり、東側は比較的平坦となつてある。南側にはブロック積みの擁壁がつくられてしまつてはいるが、堀には約四mの比高差で土壁の痕跡(⑪)が認められる。

西端からの平坦地は三〇〇mで土壁とともに直角に北側に折れ、「」字形から先は北側に張り出した小さな尾根を利用して堀がつくられている。尾根の傾斜に沿つて南北方面に大きく三段の郭があり、南側の郭(⑫)は二〇m×一五mの不整な半円形で西側と北側には高さ一m五〇m程の土壁がめぐり、南は山の斜面、東側は開放され北東隅から浅い凹みが入りこんでおり、幅一m程の道が南へとつづく。北西隅は土壁が切れて虎口となつておらず、一m五〇m程下がつて中央の郭(⑬)は二〇m×一〇mの長方形で周囲に土壁がめぐり、虎口は南側の郭とつながる南西隅と北側の郭とつながる北東隅にある。土壁の高さは高いところでは二m以上もあるが、西側部分は五〇m程と低くなつてある。北側の郭(⑭)は幅一〇m×一五m、長さ四五mで、「」の字形に屈折しており、土壁に挟まれた緩傾斜地となつてある。北東端では西側をめぐる土壁から高さ二mの土壁が突出して、東側土壁と虎口を形成する形となつており(⑮)、その先は傾斜がきつくなり山裾へと至る。この三段の郭の東側には腰郭(⑯)が三段程あり、西側は北側をめぐる平坦地が幅一〇m前後の空堀状の凹み(⑰)となつてつづいており、土壁も郭西側の土壁となつてつづく。この空堀は北東側の傾斜がきつくなる所で幅を極端に減じて土壁とともに斜面を下つていている(⑯)。絵図には空堀

と鉤の手状に曲がった土壘が表現されており、この場所の遺構が当時の様子をよく伝えていることがわかる。さらに絵図ではその先に道を挟んで食違い虎口状につくられる土壘がみられるが、現状では道路・人家となつており残っていない(19)。写真では道を挟む形で僅かに土壘の一端を確認することができる。

食違い虎口を過ぎた東側は、絵図では逆「へ」の字形に屈曲する空堀・土壘が描かれている。これは現在県道と墓地の間に遺存しており、空堀は幅五m前後長さ七〇mの浅く凹んだ平坦地(20)で、土壘は墓地により大部が削平されてしまっているが、北東隅から東側にかけて逆「へ」の字形に曲がる部分(21)が残存している。土壘南側の墓地部分は土星に沿うように幅一〇mで帯状に凹んでおり(22)、墓地東側の屈曲した土壘南側は二〇m×一三mで楕円形の郭(23)となっている。ここからさらに東側へは絵図では空堀・土壘がつづいているが、削平が著しく御名方(黒駒)神社までは遺構はない。

このほか東側の平坦地や道などが國化されているが、今回の測量では等高線により細かな地形が示され、詳細な城郭遺構の把握が行われた点、大きな成果であった。これまでの縄張図とは異なり、各遺構の配置等の関係が的確におさえられ、虎口・空堀・土壘・郭などの特質や城郭を考究する上で本測量図は有用なものとなるであろう。



第7図 能見城跡現況写真（1997年12月撮影）



第8図 能見城跡測量図 (1/4000)

## 第五章 特論

### 天正壬午の乱

—信長死後の旧武田領争奪戦について—

平山 優

### はじめに

本稿は、武田家滅亡とそれに続く本能寺の変による戦国大名間の勢力変動に伴う新たな争乱のうち、旧武田領の分割をめぐる局面の全体を俯瞰することを目的とする。旧武田領をめぐる争乱は甲斐・信濃・駿河・上野国の広範囲にわたり、またその余塵は争乱決着後も、真田昌幸の帰属や沼田領の処遇をめぐる北条・徳川・上杉・豊臣の相剋に引き継がれることに示される如く、長期にわたって燃り続け、天正十八年の小田原出兵の遠因をなし、最終的には北条氏滅亡と、豊臣秀吉の天下統一によつて決着がつけられるまで戦国争乱の最終段階を規定し続いたのである。しかし、予めお断りしておきたいのは、これらを全て取り上げることは出来なかつたということである。本稿は時期を天正十年三月から十一月に限定し、しかも甲斐を舞台にした徳川家康と北条氏直の対戦に叙述を絞らざるを得なかつた。不足分については、後日を期したいと考えている。なお、信長横死後の争乱は、「壬午の役」「壬午の合戦」と呼ばれているが、本稿では「天正壬午の乱」とする。<sup>2)</sup> 天正壬午の乱は、山崎の合戦による明智氏滅亡と、清洲会議による決着を見て結集した西国方面に対し、北条・徳川同盟成立により一応の終息を見た東国局面に分け

て考えることが出来る。そしてこの東西の軍事的安定が崩壊するのが、西国では天正十一年の賤ヶ岳の合戦であり、東国では真田昌幸の反乱と伴う上田合戦といえる。だが続く小牧・長久手の合戦で、羽柴秀吉に対する勢力へと家康が発展したのも、天正壬午の乱を除いては考えることが出来ない。武田氏滅亡まで僅かに二カ国の大名にすぎず、寡兵しか擁しえなかつた徳川家康が、四万余の兵力を擁する北条氏の甲信侵攻の野望を挫くことがなぜ出来たのか。その軌跡を追つてみよう。

### 一、武田勝頼の滅亡と織田信長の甲斐支配

天正十年（一五八二）一月、親族であつた木曾義昌が織田信長に内通したことを知つた武田勝頼は、甲府から移転してまだ間もない新府城を出陣して諭訪に入った。しかし、織田信長は機会を逃さず、これを要機に武田領への大規模な軍事動員を実施し、伊那口より織田信忠らを、木曾口より織田長益らを、飛驒口より金森長近らを、そして駿河口より徳川家康を侵攻させ、武田軍を壊滅に追ひ込んでいった。二月下旬には信濃・駿河のほぼ全城の城郭は自落・開城もしくは落城し、一族の穴山梅雪が謀反を起こしたことにより、三月三日に勝頼は未完成の新府城では籠城は適わずとして、新府に火を放ち、郡内領主小山田信茂を頼つて東への逃遁行を始めた。しかし、小山田信茂も変心したため、勝頼主従は十一日田野で自刃し、武田氏は滅亡した。信長は、武田家臣團に対する追求に着手し、小山田信茂・小菅五郎兵衛忠元・葛山信貞・長坂鈴蘭斎・今井信近・山県昌満らの國衆や出頭人を始め、武田信綱・武田信豊・一条信龍ら武田氏親族等を悉く処刑した。辛うじて追求を逃れたものの、

後に戰死した加藤信景などの例も入れれば、その数は膨大なものとなる（『甲乱記』等）。この信長の残党狩りによって、武田領における国人層はほぼ滅ぼさせられ、地域的領主制を展開していた階層は、穴山梅雪を除いて、解体したといつてよい。特に郡内領は小山田・加藤・小菅氏の滅亡により、領主不在という事態になっていた。また土屋・山県・跡部・長坂氏らの国中地域の領主層も勝頼に殉死するか、処刑されており、ここでも地域的領主制を担っていた階層はほぼ不在という事態になった。

さらにこれに次ぐ勢力を持った武川衆等の土豪層の連合体ともいべき階層も、信長の追求を恐れて身を隠しており、甲斐には郷村を基盤とした個々の土豪層がその中心的勢力となりつつあった。信濃・上野國衆にはこうした追求はなされず、その相違は際立っていた。後に、徳川・北条氏が結集を呼びかけたのは、信濃・上野が禪津・真田・依田・安中氏の國衆であったのに対して、甲斐では土豪層であったのは、こうしたことによるものであつた。特に、甲斐はこうした土豪層結集の中核となる階層が不在となつたことから、甲斐領國化を目指す両氏にとって、その結集を進める核を何に求めるかが課題となつたのである。

信長は勝頼滅亡後、旧武田領の分割を行い、甲斐国（穴山領を除く）と信濃國諏訪郡を河尻秀峰、木曾・筑摩・安曇郡を木曾義昌、高井・水内・更級・埴科郡（川中島四郡）を森長可、伊那郡を毛利秀賴、小県・佐久郡と上野国一国を滝川一益、駿河国を徳川家康、穴山梅雪は甲斐国河内策安堵というように分割し、武田領出兵に際して急遽参戦し、駿河国駿東郡と上野国西部を占領した北条氏政・氏直を、この分割協定から締め出したのである（『信長公記』）。北条氏は、信長・家康に対して

盛んに音物を贈つて友好の意を示したが、それが天正七年に締結した織田・北条同盟を強化するまでは至らなかつた。北条氏の分割協定からの除外や、上野国における滝川一益の動向及び北条氏政・氏直と信長との対面不成立などを見ると、双方の関係は微妙なものであり、むしろ信長は北条氏討伐を次の戦略日程に掲げていたというのが実態である（<sup>3</sup>）。

## 二、本能寺の変と徳川・北条・上杉氏の動向

本能寺の変と徳川家康 天正十年六月二日未明、明智光秀は京都本能寺の織田信長宿所を襲撃した。信長は衆寡敵せず自殺し、嫡男信忠も父信長を救おうとしたが果たせず、二条御所に立て籠もつたがこれも敗北の最後を遂げた。この事件は、戦国末期の勢力図を大きく塗り替える事態のきっかけとなつた。当時、徳川家康は穴山梅雪を伴い、信長一行と行動を共にしていたが、本能寺の変前日には信長と別れて、堺に滞在していた。家康が京都の凶報を聞いたのは、同日の昼頃であったという。家康と梅雪は身辺の危険を察知して急遽堺を出立し、伊賀越えで本国に帰る手筈を調えた。この伊賀越えは困難を極め、家康は度々の危機に遭遇したと伝えられるが、漸く虎口を脱して伊勢に辿り着き、六月五日に岡崎へ帰還した。一方、堺と一緒に脱出した穴山梅雪は、途中家康一行と別れて独自に甲斐への帰還を目指したが、宇治田原で土民の襲撃にあって落命した。家康と行動を共にしなかつたのは、梅雪が家康を疑つたためであるという。家康は、伊賀越えの最中の六月三日には本国に向けて、帰国次第出陣するので準備を調べておくよう指示している。ところで、

従来この出陣準備は、信長の弔合戦をすべて家康が明智光秀を打倒することを目的としたものであるというのが通説であるが、これについては幾つかの問題点がある。以下、事実関係を追いながら家康の動向を追つてみよう。

家康は六月五日に帰国すると、まず織田信長の追求にあつていた武田遺臣のうち、遠江国桐山に密かに匿っていた武川衆折井次昌・米倉忠継を呼び寄せ、早々に帰国して甲斐國の武田遺臣を徳川氏へ帰属させる工作を進め、家康の出陣を待つように下知したといふ（『寛永諸家系図伝』・『諸侯余録』等）。次いで翌六日には、駿河の岡部正綱に対して、甲斐国下山に移り、城（音沼城）を普請するよう命じている（中村孝也『徳川家康文書の研究』上巻一八五ページ、以下「徳川」と略す）。下山は穴山梅雪の本拠地であるが、梅雪は三日前に横死しており、穴山家は勝千代が後継者として健在であったが、幼主であり事實上当主不在の状況であった。家康が正綱を穴山氏の本拠下山に移動させて城普請をさせた背後には、梅雪機死に伴う穴山氏の弱体化を利用して、これを徳川方に従属させることで、徳川領を北から伺うことのできる勢力を消滅させようとしたことと、甲斐侵攻のための拠点と甲駿の軍事ルートを確保する意味があつたと考えられる。またこれが可能であったのは、梅雪機死後に家康がいち早く穴山衆に対して工作を行った結果であろうと思われ、その後徳川軍が甲斐侵攻への準備が整わない間の北条氏直への対抗勢力として穴山衆は活動しており、六月二十一日に羅坂口で反徳川の動向を示した大村一党を殲滅させているのは、家康の従属工作を推察させる。恐らくその時期は、家康の帰国直後の五日か、伊賀越えの最中の四日で

あろうと見られ、六日の岡部正綱への下山移動と築城指示は穴山衆の家康服属が成功した結果と見なされる（<sup>2</sup>）。そして、家康は七日に本多百助・信俊を甲府の河尻秀隆のもとに派遣し、安否を問うとともに今後の事態への対応を協議させている（<sup>3</sup>）。

一方、家康は六月五日の岡崎帰還直後に陣営を発し（『家忠日記』）、本多忠勝に命じて美濃国今尾城主高木貞利に使者を出し、明智討滅の軍勢を派遣するため、今尾城を宿所に充てることへの了解を求めている（高木新兵衛書上「諸侯余録」・「大三川記」）。高木氏はこれを了承し、六日に東三河の諸将には岡崎城へ詰め、その他は軍装を調べて下知を待つよう指示しているが、九日に出陣は翌日に延期され、十日に出陣は十一日に変更となり、さらに十一日には十四日出陣へと延期された（『家忠日記』等）。家康は漸く十四日に岡崎を発し、尾張国鳴海に至るのであり、十六日には、松平家忠・酒井忠次らに津島への陣替を命じている。このように、徳川軍の主力は確かに西へ移動していることが確認できる。ところが先に見た甲斐への工作は、こうした西への出陣準備の間に実施されているのである。このような、家康の動向を見ると、三度にわたる出陣の延期や、家康の政治工作が西ではなくおもに甲斐に向いているのは、東西の情勢を見極めながら事態に対処しようとする家康の慎重な姿勢と見なすことが出来よう。だがこうした動向は、家康の戦略目標が西ではなく、当初から東ではなかったかと疑わせるものがある。本能寺の変で最も不安定となつたのが、旧武田領であった。中部地方の政治的空白は、最も影響を受けることが少なかつた北条氏直に有利に働いていた。織田・徳川氏は武田氏滅亡時に、北条氏政・氏直から様々な音物を受け

たが、同盟強化に至る関係を構築していたわけではなかった。しかも、信長の旧武田領分割に際しては、北条氏は完全に無視された形になってしまった。信長は北条氏にとって織田軍の旧武田領分割を無効にし、勢力拡大への動きを警戒したものであったと考えられ、状況の推移によっては徳川軍主力を東へ転じることが予想されていたのではないかと思われる。また、家康に於て明智討伐を実施するためには、長驅の行軍を余儀なくされるし、その間領国を留守にすることは、周辺の状況から考えて政治的に暴挙に等しい。家康が本気で上洛を目指していたとは、到底考えにくいと思われる。

さて、西へ遡々として進軍する家康に、二つの事件がもたらされた。まず甲斐で政変が起つたという情報である。先に河尻秀隆の元に派遣した本多百助が、秀隆によって暗殺され、次いで秀隆自身も武田連臣の指導する一揆によって処刑されるという事が起きた。また、もう一つは、家康が出陣の名目としていた明智討伐が、六月十三日の山崎の合戦で羽柴秀吉によって実現され、その報告が十九日で秀吉より鳴海の家康へもたらされたことである。このため、家康は同日津島に布陣していた酒井らの軍勢を鳴海に引き揚げさせ、次いで二十一日岡崎に帰還した。だが、家康の元に北条氏直が甲斐侵攻を目論んでいることや、これを諒として手引きしようとする甲斐国人層が活動を始めた報がもたらされた（『家忠日記追加』等）。これにより、家康の戦略目標は甲斐へと本格的に転換することになった。

北条氏直の動向 本能寺の変を知った北条氏直は、信長の旧武田領分割から除外され、特に領国であった上野国における権益を大きく損じたことから、上野国の奪回を目指し、滝川一益を攻撃すべく滝城主北条氏照・鈴形城主北条氏邦らとともに大軍を擁して侵攻を開始した。その結果、六月十七日に神流川の合戦で滝川軍を撃破して一益を追放し、上野の国人衆を相次いで麾下におさめた。この時に真田昌幸や安中・内藤氏を始めとする武田遺臣が北条方に降つた。しかし、真田昌幸の属城沼田城などは堅く城を守つて北条氏直に明け渡さず、いわゆる和戦両様の構えを崩さなかつた。氏直はこうした諸城を攻略せずに、上野国衆に包围させたまま自身は本隊を率いて六月二十八日に碓井峠を越えて信濃に侵入した。北条軍はまず小諸城を陥落させると、佐久・小県郡の兩津・室賀・相木・小泉氏を相次いで味方につけ、さらに諏訪高島城を奪取して諏訪地方を回復していた諏訪賴忠にも呼びかけてこれを味方とした。また木曾郡の木曾義昌も北条氏に書状を送るなど、信濃における北条氏の地位は次第に有利なものになっていった。こうして佐久・小県・諏訪郡を味方につけると、七月十二日に海野平へ進軍し、川中島地方を伺う態勢を整えた。

上杉景勝の動向 本能寺の変は、上杉景勝にとってまさに傍伴であった。織田信長は武田領侵攻とともに、上杉領への侵攻に着手し、北陸方面軍の柴田勝家・前田利家・佐々成政らをして上杉領を圧迫させ、越中国魚津城を包囲していた。さらに信長は、揚北衆新発田重家に謀反を起こさせてこれを支援し、景勝が北陸方面の織田軍に全力で対抗できない策を敷いた。この間、信長に攻撃されていた武田勝頼は、景勝に援軍を要請

し、景勝は上条宣順らを春日山から派遣して長沼城へ送り込んだが（「上杉家文書」）、武田氏は滅亡し、援軍は無効を要ることとなつた。むしろ景勝は勝頼への援軍を名目に、甲越同盟成立時に割譲した北信濃一帯の回復を目指し、これをもつて迫り来る織田勢力に対抗しようとしたのが実情であろう。だが、武田滅亡はそれまでは比較にならない織田勢力の圧力を上杉領にもたらした。信長より川中島四郡を与えられた森長可は、海津城に拠点を置いて、春日信達（春日虎綱の子）、小幡昌虎等の旧武田遺臣を属下にするなどの仕置きを整えると、北信濃の上杉領に攻勢をかけることになったのである。これに對して景勝は、芋川正元らを支援して四月五日一揆を蜂起させ、稲葉彦六の守る飯山城を包囲した。森長可是調訪の織田忠信に援軍を乞うたので、忠信は稲葉重通を始めとする稲葉一族のほか、团平八郎忠正を派遣した。芋川らの一揆勢は、大蔵城に籠城して抵抗したが、七日に長沼で森長可らに大敗し壊滅した（「信長公記」）。景勝も上条宣順・山吉景長らを長沼に派遣して後詰を試みたようであるが全く及ばず、自身は新発田重家の謀反を鎮圧するために出陣中で動けなかつた。上条らは信濃国境に新たに城普請を行つて備えを固めるほかなかつた（「読史堂古文書」「歴代古案」等）。五月に入ると、織田軍の魚津・松倉城への攻撃が激しさを増し、遂に景勝は十五日に新発田重家の包囲と北信濃への出兵を切り上げて、魚津城の後詰に出陣した。しかし、織田軍の包囲網は厳しく、容易に手が出せなかつた（「歴代古案」「上杉家文書」等）。織田方では、景勝の後詰を魚津から引き離すとともに、上杉を三方から包囲殲滅すべく、五月二十三日に上野国滝川一益が三国峠を越えて魚沼郡への侵攻を開始し、

また海津城の森長可も飯山を経て、越後国関山を突破し、一本木で上条宣順らを擊破して春日山を目指した（『總見記』、『北越軍記』等）。これを聞いた景勝は、魚津城救援断念して二十七日に越後に戻り、森軍の侵攻に備えた。滝川軍は魚沼郡樺ノ沢城栗林肥前守・長尾伊賀守が漸く防いだが、森長可是春日山近辺まで進出して海津に引き揚げた。景勝の危機は去つたが、後詰を失つた魚津城は、六月三日に遂に落城した（「越中治乱記」等）。ところがここで本能寺の変が勃発したため、柴田・前田らの軍勢は相次いで越中から退去した。また森長可も事態が容易ならざると悟り、海津城を退去した。景勝はこれを知ると、六月十六日に春日山城を出陣して、十八日には長沼城に入り、海津城への侵攻準備を整えた。このため川中島四郡の国人層は相次いで上杉方に従属することになり、春日信達・小幡昌虎・屋代秀正・栗田民部等は上杉家の重臣山浦（村上）源吾景國（村上義清の子）の傘下に入り、海津城を守備することになった。川中島四郡の仕置きを終えた景勝は、次いで小県郡への経路も進めた。また、筑摩郡への経路にも着手し、當時木曾義昌が混乱に乗じて占領していた重要な戦略拠点深志城を攻撃すべく、この地域の旧領主小笠原長時の弟洞雪（貞種）に兵を授け、これを陥落させることに成功した。また七月には安曇郡仁科衆より人質請取の交渉がなされるなど（「上杉家文書」）、景勝の影響力は北信濃を中心徐々に広まりを見せていた。この段階では、信濃支配は北条・上杉氏優勢のまま経過していたが、佐久から小県へ侵攻していた北条氏直と、川中島四郡遂に軍事衝突の可能性が高まつた。これは信濃支配の拡充を目指す両者

にとつて不可避であったのである。

北条・上杉の対陣と家康の動向 氏直は七月十二日に海津城攻撃を目指して川中島へ迫った。一方、景勝は清野に布陣して迎撃の体勢を整えていた。ところが、北条軍の侵攻は予め調略がなされた上でのことであつた。これは海津城の春日信達が、北条方になつていた真田昌幸と通じ、北条氏直を川中島に引き入れて上杉景勝と合戦になつた際には、自身は海津城兵を率いて景勝を撃撃しようとしたものである。しかし、この計画は密使が捕らえられたため七月十三日に発覚し、信達を始め妻子らは処刑され、城外に晒された。上杉景勝は、鞍掛城（鞍骨城）に本陣を据え、赤坂山にかけて直江兼続・泉沢久秀らを配置し、更級郡八幡（更

城市八幡）に進出してきた北条軍を迎撃する態勢を整えた（『上杉家御年譜』等）。海津城を中心にして、それを取り巻く妻女山を含む城塞群を拠点に布陣する上杉軍に対して、海津城春日信達の内応が期待できなくなつた今、正面からこれと衝突するには、大軍を擁する氏直としても躊躇せざるを得なかつた。こうして北条方の自論見は崩れたため、戦線は膠着状態となり、北条軍は決戦の機会を逸した。北条氏直は遂に上杉との決戦を避け、兵を退くことし、川中島地方制圧を断念した。これには家庭の動向が大きく作用していた。このころ家康は、甲斐・佐久・調訪で活発な軍事行動を展開し、北条氏の既得権を脅かし始めたのである。景勝はここでも危機を回避できたのである。しかし、上杉の信濃における勢力拡大はこれ以後停頓し、その後筑摩郡は小笠原貞慶によって奪取されるなど大きく後退するのである。これは、新発田重家の反乱がなおも続いており、その鎮圧のために、信濃経略に時日を費やすこと

が出来なかつたことや、その後大雪によつて信越国境の往来が困難となり、迅速な対応が事実上不可能となつたためである。上杉景勝は八月から十月までの重要な時期を、新発田重家に封じられてしまつた。また、川中島から佐久郡へ転進した北条氏直は、上杉景勝が徳川家康と共に謀殺（上田）に残留させて、上杉軍の進出を防止することとし、佐久郡へと引き返した（『武徳編年集成』等）。真田昌幸はこうして北条軍本隊から切り離され、独自の行動を開拓する余地を得たのである。これが後に、北条氏直に大きな打撃を与えることになる。

### 三、徳川家康の甲斐経略

家康の武田遠臣機柔 家康は武田氏滅亡に際して、多くの武田家臣を保護したといわれている<sup>(2)</sup>。先に遠江国桐山に武川衆の頭目折井次昌・米倉忠繼を匿つたのを始め、信濃國佐久郡の国人衆依田信蕃を遠江国二俣の奥小川に避難させたのもその一つである（『依田記』）<sup>(3)</sup>。信蕃は本能寺の変直後に家康の「甲斐衆引付可申」との命令を受けて甲斐に向かい、六月十二日に中道往還の迦葉坂（かとうざか）で自身の「鍔ノ旗」を掲げて甲斐の武田遠臣に呼びかけを行つた。この旗を見て、横田尹松らが統々と集まり、その数は実に三千余人に達したという。信蕃はこの人數を率いて、六月二十日に小諸に帰り、この時ちょうど北条軍に追われてきた龍川一益をもてなし、二十三日に木曾へ送り出すとともに、佐久郡の諸将を徳川方に引き付ける作業に入った。この結果、福津昌綱らが信蕃の仲介で家康から判物を買うなど（『福津文書』）、徳川氏の工作が有利に進む

かに見えた。そこへ、北条氏直の先手大道寺政繁が佐久に侵入し、小諸城に迫つてこれを占領した。信蕃の自論見は北条の大軍の前に頓挫を余儀なくされ、福津・室賀・相木・伴野や芦田一族の中からも北条軍に属する者が続出した。信蕃は春日城に籠もつたが、これを支えることが出来ず、さらに奥の三沢（芦田）小屋に籠城することを余儀なくされた（「依田記」）。一方、家康に帰国を命じられて武田遺臣の結集を謀っていた武川衆米倉・折井氏らは、津金衆小尾・津金氏らとともに六月下旬には早くも信濃への工作を開始し（「徳川」二九七・三一三ページ）、武川衆は甲信国境小沼小屋を攻撃して、北条方に被害を与えた。七月月中旬までにこれを攻略して首級を家康に進上している（「寛永譜」「諸牒余録」）<sup>(3)</sup>。

**甲斐の反徳川勢力掃討** 武川衆や依田信蕃による武田遺臣の懐柔は、家康に有利に推移したが、決して甲斐の国人衆全てが徳川氏に傾いたわけではなかった。六月中旬には山梨郡倉科の土豪で、雁坂峠の守備を担当していた大村三右衛門尉忠堯・伊賀守忠友が北条方につき、雁坂口から北条軍を引き入れようとした（「甲斐國志」）。また、募つたがこれに応ずるものは少なかつたという（「甲斐國志」）。また、甲斐惣社甲斐奈神社（権立明神）を拠点としていた大井撰元も北条方に当していた大村三右衛門尉忠堯・伊賀守忠友が北条方につき、雁坂口から北条軍を引き入れようとした（「甲斐國志」）。甲斐奈神社は御坂峠から鎌倉街道を経て甲府に通じるルートを掌握する要衝にあり、これは御坂口から北条軍を引き入れようとしたものであろう。既に北条氏直は、六月十五日に郡内の土蔵渡辺庄左衛門尉に朱印状を与え、郡内に帰還させるとともに「前々之被官共」や「因之者」を結集させるよう指示しており、北

条氏の甲斐経略も活発化していた（「甲州」一三〇〇号）。このように北条方の動向は六月中旬から下旬にかけて俄に活発となり、河尻秀隆の死に伴う政治的空白は、北条・徳川両氏にとって勢力拡大の好機であつた。しかし、このころ家康は鳴海に出陣しており、甲斐にすぐ出兵することが出来なかつた。そこで家康は、既に懷柔していた有泉大学助ら六山衆をこれに対処させるために出陣させ、雁坂口で蜂起した大村党や、北条方の郡内一揆に呼応した東郡（甲府盆地東部一帯）の勢力が北条軍に結集する前に撲滅せることに成功した（「徳川」二九八ページ）。ここに見える「郡内一揆」とは、渡辺庄左衛門尉等のような北条方の土豪層を結集したものであろう。

**家康の甲斐侵攻** 家康は六月二十一日に岡崎に帰還すると、二十八日に大須賀高・大久保忠世らの徳川軍を先手衆として甲斐に派遣し、市川に大須賀・甲府に成瀬正一・岡部正綱・穴山衆を配置して守備を固め、武田遺臣への懐柔工作を実施させた（「三河物語」等）。特に家康は、岡部正綱の献策を容れて、織田信長によって焼き討ちにされ、灰燼に帰していった武田信玄の菩提寺恵林寺の再興と、武田勝頼の菩提寺を滅亡の地である田野に建立することを甲斐に布告した。このため、甲斐衆は家康に次第に属すようになった（「朝野旧聞叢書」第一五二等）。

こうした懐柔工作を実施するとともに、家康は大久保忠世・石川康道、本多康孝らを派遣して、甲斐・信濃の土豪・国人層を味方につけるよう指示した。大須賀高らの甲斐平定は容易ではなかつたらしい。『三河物語』によれば、「大須賀五郎・左衛門尉ハ市河に居たり、然共爰々彼方、一騎（揆）共にて鎮らざる處へ、大久保七郎・右衛門尉姥口へ付たる由を

五郎左衛門尉も聞て、さてハ七郎右衛門尉が付たるか、今ハ心安とて大息をつきける處に、石川長土（門）・本田豊後父子も付たると申ければ、大方一騎も鎮りけり」とあり、徳川方が必ずしも圧倒的に甲斐国で有利であったわけではなかつたようだ。土蔵脇の一揆も当初はなかなか鎮まらなかつた。しかし、徳川軍が本格的に投入されると、こうした蘇起も終息に向かい、大久保忠世らは甲斐の沈静化を見極めた上で、武川筋から信濃に向かつた。ここで大久保らは諒訪に至り、高島城を奪取して父祖の地を回復していた諒訪頼忠に使者を送つて徳川方につくことを説得している。頼忠はこれに応じて徳川方に帰属した。その後、大久保忠世らは伊那郡への工作にも着手し、知久頼久・下条頼安らが相次いで徳川方に服属する約束を取り付けた（『三河物語』等）。こうした伊那・諒訪国人衆の徳川氏への従属には、三河國より伊那へ別働隊として侵攻した、山家三方衆與平信昌の圧力も無視できない（『寛永譜』等）。またこれより先の六月二十一日には、伊那郡松尾城主小笠原信綱が、菅沼藤蔵定政を通じて家康につくことを申し入れた（『家忠日記追加』・『寛永譜』等）。これが信濃の有力国人衆の中で、徳川方につけた初見である。

一方、家康自身の出陣はかなり遅れていた。その事情は明らかではないが、恐らく明智光秀滅亡後の西國の情勢を注視し、それを見極めてから行動を起こしていたのであるまい。家康が先手衆を派遣し、自身は岡崎城に駐留していた六月二十七日に、尾張国清洲城では、羽柴秀吉・柴田勝家・丹羽長秀らの織田家重臣が一同に参会した清洲会議が開催され、信長死後の旧織田領の分割協定がなされた。これにより、西國の争乱は一応の集結を見、不安定な状況がなくなつたことで、家康は

東への全軍投入を決定したのである。しかも、家康はこの間、清洲會議をリードし、一躍勢力を拡大した羽柴秀吉と交渉を持っていた形跡がある。それは次の史料によつて知られる。

今度信長不慮之事御座候ニ付而、信州・甲州・上州被置候者共罷返候、然者両三ヶ國之義、敵方非可被成御渡儀候條、御人數被遣、被屬御手ニ候様ニ被仰付尤ニ存候、猶追々可得御意候、恐惶謹言候、

七月七日

羽柴筑前守

秀吉判

### 家康様

この書状は、清洲會議直後に旧織田領分割案を主導した秀吉から受け取つたもので、注目されるのは申上の旧織田領は武将が退去したため事實上放棄されたものと見なし、これを家康が手に入れることに異存のないことを明示していることである。これにより家康は、東國の旧織田領を敵方（北条氏等）に渡すべきではなく、軍勢を派遣して徳川領として然るべしという秀吉の明確な言質を取ることに成功したのであり、甲斐侵攻にあたつて西國の旧織田勢力の動向を顧慮する必要がなくなったのである。家康の出陣は、こうした秀吉との交渉が実を結び始めたことを見切つたうえで開始されたものと見られ、この書状の日付である七日には大宮に布陣していた。

家康は七月二日に甲斐に侵入すべく掛川城に入り（『家忠日記』）、三日には有泉大学助・穂坂常陸介ら大衆衆に対し、大久保忠世・本多広孝父子・石川康通らと謀合して新府城に移り、信濃への計略を実施するよう命じ（『徳川』三一〇ページ）、自身は四日に駿河田中城に入つ

ており、後継部隊の松平家忠らは遠江国牧野城に着陣した（『家忠日記』）。

家康はここで甲斐侵入に際して、伊豆・相模の北条軍の駿東部

侵攻に備えた布陣を敷き、田中城に高力清長・興國寺城に牧野康成、三

枚橋城に松平康親、伊豆国天神川砦（静岡県長泉町南一色）<sup>13)</sup>に稻垣長

茂・伊賀衆を配置した。これにより家康は、北条軍の侵攻によって退路

と補給路が断たれ、駿河が蹂躪されないよう万全を期したのである

（『武徳編年集成』『寛永譜』等）。

家康は、甲斐侵入のルートを中道往還に定め、九一色衆渡辺因幡介守らをこの案内者に任じるとともに

警護を命じ（『徳川』三一ページ）、五日に江尻城に入ると、本多重

次に江尻・久能山城の守備を命じて、駿東郡・伊豆の徳川方諸城への後

詰とし（『諸侯余録』『武徳編年集成』等）、翌日には大宮へ進み、八

日に精進を経て九日に甲府に入った（『家忠日記』）。この間にも先手

衆大久保忠世らの工作により、伊那郡下条城主下条頼安<sup>14)</sup>らが六日に家

康に起請文を提出し（『浜松御在城記』等）、伊那での徳川方は次第に

優勢になつた。家康はこの機会を逃さず、信濃での勢力を安定的なもの

にするため、下条頼安や同じく伊那郡神之峰城主知久頼久に対しても諒訪

に出陣し、徳川軍と合流するよう指示している（『徳川』三二二・三一

五ページ）。家康が大久保らの御先手衆に、下条・知久らの信濃衆を諒

訪に結集させたのは、諒訪を確保する目的もさることながら、恐らく北

条氏直軍が佐久に侵攻を開始したことに対する抗対である。北

条軍は既に六月二十八日に碓井峠を越えて佐久に侵入し、諸城の攻撃を

開始していた。

#### 四、北条氏直の甲斐侵攻

北条氏直の佐久侵攻 北条軍は小諸城を陥落させると、依田信蕃の籠も

る春日城を攻め、信蕃が支えきれず三沢小屋へ移ると、七月六日から

小諸城に据えた大道寺駿河守政繁に命じてこれを攻撃させた。この報せ

を受けた家康は、御先手衆大須賀康高・大久保忠世らを通じて、三沢小

屋に籠もる依田信蕃の安否を問い合わせ、戦闘の経過に重大な关心を持つた。

信蕃が滅亡すれば、佐久郡における徳川方の根拠地は失われる。家康に

とって、信蕃を支援することが重要な課題となつた。信蕃は家康に援軍派遣を要請したらしい（後述）。しかし、信蕃は善戦し佐久郡の土豪層

への工作を続けたため、平尾城主平尾三昌秀を始め清野・杉原・関・

桜井・速水・小林・塙入氏らが信蕃に属して徳川方につき、北条軍と対抗した（『寛永譜』『諸侯余録』）。

一方、氏直本隊は川中島方面に進出しつつも、佐久郡の福津・伴野・相木氏や、小県郡の室賀・小泉氏ら

を配下におさめ、甲斐の諸将への工作も怠りなかつた。例えば、氏直は

津金衆小尾監物祐光・津金修理亮胤久らのもとに密書を送り、徳川方から寝返るよう必要としていることなどは、その代表的なものである

（『寛永譜』等）。現在伝えられている北条氏の懐柔工作の事例はさほど多くはない、家康による懐柔工作のみが突出して記録されているが、

それは江戸幕府成立後の家康神格化に伴う記録の性格に規定されて、伝わらなかつただけであろう。『寛永譜』『寛政譜』『諸侯余録』等の諸家書上には、家康への忠誠や親密度などが性格上強調されるのは当然であり、北条氏との関係などは記録事項から外されていった可能性が高い。

先に見たように、諸記には家康の甲斐経略も当初から武田道臣が統々と

徳川に率いたように記録されているが、実際には大須賀康高らの先手衆が、大久保忠世らの軍勢の到着により安堵し、これに力を得て一揆鎮定と慰撫を次第に実現していくことあるように、頻発する一揆の鎮定が向に進んでいかつたこと、つまり武田連臣の結集や領民の徳川帰属が決して平坦ではなかつたことを物語つている。<sup>1)</sup>

さて、北条氏直本隊が川中島に進出していった間際に、徳川家康は依田信蕃の築もる三沢小屋に統々と援軍を送り込み、兵力増強を進めていた。氏直は上杉景勝と対峙しながら、背後の徳川軍の動向に神経を尖らせていた。七月十三日に氏直は、武田氏の旧臣で佐久郡の土豪井出善四郎・井上善九郎に宛てて書状を送り、甲斐の徳川軍の動向を探り、逐一報告するよう命じている（『戦国遺文後北条氏編』二三七一号）。しかし、家康の調略も各所に及んでおり、北条氏に従っていた福津昌綱が七月十四日には家康に密かに内通するなど（『福津文書』）、北条氏支配下の豪族の去就にも微妙なものがあつた。北条・徳川・上杉といった三者鼎立という情勢の下ではどのように事態が推移するかわからないため、北条氏に身を投じながらも徳川とも詔みを通じておくという表裏を構えざるを得なかつたのである。しかし、福津昌綱はその後も北条陣営に身を置き続けるのである。このように、家康の甲斐経略と信濃への勢力浸透が國られてくると、氏直も上杉景勝との対陣を長期間続けるわけには行かなかつた。そこへ氏直の下に譲訪高島城主譲訪頼忠の服属申し入れがあつた。頼忠はこれまで徳川方についていたが、反旗を翻し北条方に身を投じたのである。このため、頼忠は徳川軍の攻撃を一身に浴びることになった。氏直は頼忠に朱印状を送り、その忠節を歓迎することも、

景勝との決戦を回避して、急速佐久郡へと兵を進めた。その時期は明らかではないが、上杉景勝が七月十九日付で会津蘆名盛隆の臣遊足庵に宛てた書状に「爰之谷津波之構廻所、不出合候、元来如見聞之、無夫甲斐腹病之奴原、笑敷有様候」（『上杉家記』）と述べ、氏直軍が撤退したことと伝えてるので、その頃であろうと思われる。氏直本隊は上杉軍への備えとして真田昌幸を尼ヶ瀬に残すと、佐久郡に戻り、依田信蕃の築もる三沢小屋の攻撃に着手し、譲訪頼忠への工作を進めるとともに、譲訪郡の諸将への働きかけを行つた。

譲訪頼忠の反乱 本能寺の変後の混乱に乗じて高島城を占領し、譲訪郡を回復した譲訪頼忠は、六月下旬に譲訪に侵攻してきた徳川軍の先手衆大久保忠世の説得によって徳川へ帰属することを申し入れた（『三河物語』）。一方で頼忠のもとに、六月二十五日に頼忠家臣千野昌房のものとへ北条氏直臣斎藤定盛から書状が送られ、北条方への帰属を求めるれていた（『千野文書』）。頼忠は北条・徳川との双方に接触を保ち、情勢を見計らつて、去就を決めようとしていたようである。このため、家康への高島城引渡済交渉は難航した。七月十五日に家康は下条頼安に譲訪への出陣を要求しているが、その中に「將亦高島之儀、種々懇望之子細候、一両日之内請取可申候」と見え、頼忠が交渉を引き延ばしていた様子が伺われる（『徳川』三三二ページ）。家康は大須賀らの御先手衆と、下条・小笠原信頼らの伊那衆や、伊那を経略しつつ北上していた奥平信昌らに譲訪へ集まるよう指示し、十八日までにほぼ集結を完了させた（『家忠日記』『寛永譜』等）。家康は譲訪を拠点に北条氏に対抗しようととしたのである。また七月十四日に家康は、酒井忠次に五箇条に及

ぶ条目を与え、信濃統治の方針を通達した（『徳川』三一九ページ）。

忠次はこれを携えて七月十七日に台が原に着陣し、次いで諫訪に入った（『家忠日記』）。そしてこの条目を根拠に、頼忠に高島城明け渡しと酒井忠次配下に属すべきことを迫った。これを聞いた頼忠は激怒し、北条方へ帰属することを決めて蘿城の態勢に入った。『家忠日記増補』『寛永譜』等によると、双方が衝突したことを知った家康が、大久保忠世・折井次昌らを頼忠の下に送り、頼忠は家康直属であつて忠次配下ではないことを確約したため、頼忠は家臣千野・沢氏を派遣して家康と交渉させ、頼忠も息子頼水とともに甲府に赴いて一旦は関係を修復したという。しかし、両者の和談は結局破れ、頼忠は二十二日から酒井・大須賀らの徳川軍と戦闘を開始し、高島城に籠城した。実は頼忠は、七月十三日には既に北条方帰属の意向を示しており、北条氏直や松田憲秀から証文を受けていた（『千野文書』）。但し、これは先にも述べたように、両属關係を保ち、時勢を見て去就を決めるための手段として、北条から証文を貰い受けたのである。頼忠が徳川を離れて、北条につく決意を固めたのは、やはり家康の諫訪統治が酒井忠次によつてなされ、その結果諫訪郡の領主としての地位を排除される可能性が出てきたからであり、自己の権益を擁護するために北条方にいたと見られる。家康の名目と酒井忠次の強硬な姿勢が、頼忠を北条方に走らせてしまつたのであつた。その後、徳川軍は八月三日まで高島城を包囲し、しばしば諫訪勢と戦火を交えているが、遂に落城に追い込むことが出来なかつた（『家忠日記』）。

## 五、徳川・北条軍の対峙と両軍の作戦

伊那・筑摩郡の状況 家康は甲斐の計略を進めるとともに、信濃の領国化をも意図し、諫訪・伊那・木曾郡への工作も開始した。まず奥三河より山家三方衆奥平信昌を伊那に侵攻させ、いち早く松尾城・主小笠原信義を帰属させた。さらに武田家親族の下条頼安も七月六日に家康に起請文を提出して從属の意志を示し、下伊那地方の平定はほぼ完了した。家康は下条・知久氏に七月十日までには諫訪に出兵するよう命じ、伊那衆を結集して、態度を明らかにしない諫訪頼忠と、頼忠が頼みにする北条氏直に対抗しようとした。一方、このころ筑摩郡でも政変が起つていった。上杉景勝の支援によって深志城を攻略していた小笠原洞雪斎に対し、小笠原長時の息子貞慶が松本平に侵入して、深志城明け渡しを迫つたのである。貞慶は織田・徳川との繋がりが深く、しばしば武田勝頼の退勢に乗じて、織田同盟の支援を得て信濃帰還を伺つていた時期があり、その縁により家康とも昵懃であった。貞慶は七月月中旬に家康に使者を送り、深志に帰還したいので、そのための軍事行動を容認してほしいと申し入れ、家康はこれを承認した（『寛永譜』等）。しかし家康は、貞慶の動向を監視するために、伊那に進出していった奥平信昌に塙尻峰に進んでこの動向を見届けるように指示した。貞慶は父長時の旧臣層に働きかけて、父祖の地回復を訴えた結果、上杉の支援によつて深志を占領していた洞雪斎よりも貞慶に従う者が続出したため、洞雪斎は深志城を確保することができず、これを明け渡して逃亡した（自刃したとの説もある）。『寛永譜』『二木家記』等）。その後、貞慶は息子秀政を人質として家康に送り、帰属の意志を示した（『諸侯余録』等）。また伊那郡では、下条

賴安が箕輪城主に復帰していた藤沢頼親を降伏させ、さらに高遠城を占領していた（『徳川』三二二ページ）。このとき高遠城を保持していたのは保科正直である。正直は本能寺の変による混乱に乗じて旧領高遠城を回復して北条氏直に従属していたが、奥平信昌に攻撃されたため、抗しきれずに家康に従属した（『高遠記集成』『矢島文書』）。その後、正直は家康から伊那郡半分を宛うとした朱印状を受け取っている（『徳川』三八四ページ）。こうして、徳川方の勢力は伊那・筑摩郡では安定したものとなつた。その後、下条らは北条軍が南下して来ると、飯田城に奥平信昌とともに籠城して、北条軍の侵攻に備えた。

次に木曾義昌であるが、当初は北条氏直へも帰属の意志を示していたらしい（千野文書）。しかし、事態が徳川方に有利になると、八月晦日には信長より与えられた筑摩・安曇郡安堵の判物を受け（『徳川』三六一ページ）、次いで家康より起請文を送られ、さらに伊那郡実輪諸職を与えるとした知行宛行状を受けた（『徳川』三七一ページ）。家康はこのよくな破格の約束をもつて、木曾・保科・小笠原氏らの強豪を味方にすることに成功し、伊那・木曾・筑摩・安曇郡の確保に成功した。しかし、こうした諸勢力の動向は、北条・徳川両氏の間を揺れ動く微妙なものであり、その安定した徳川方への帰趨は、北条氏との対戦にかかっていた。家康は、北条軍との対決に存亡の危機をかけることになつたのである。

依田信蕃の奮戦 信蕃は三沢小屋を守護して奮戦していたが、兵糧の乏しが激しく、その補給に苦慮していた。信蕃はその後、常に兵糧欠乏の課題に直面することになる。佐久は北条氏に席巻されつつある以上、家

康からの補給はかなり厳しいと考えられた。そこで信蕃は、佐久郡の諸将への工作を継続しつつ、同時に兵糧支援を求める作戦を取った。『寛永譜』によると、信蕃の工作により岩村田城（大井城）に大井美作守とともに籠城して、北条軍に属し、三沢小屋を攻撃していた者のうち、高付久利・原長正・中沢久吉らがこれに応じ、夜毎密かに三沢小屋に兵糧を運び入れ、信蕃と謀って時節を申し合わせて合戦すべきことを約束し、その後高付氏らは岩村田城に放火して出奔し三沢小屋に合流したという。このため氏直は、人質として田口城に抑留していた中沢らの母を処刑したという。この他、同書によれば、信蕃の工作によって徳川方に転じた佐久郡の北条方に、清野満成・杉原景明・閑信正・桜井久忠・桜井守長・桜井助正・小林重吉らがおり、さらに平尾平三昌秀が従属している。家康は平尾平三昌秀に七月十一日付で知行宛行状を発給し、森山豊後守に感状を与えている（『徳川』三一五ページ）。

家康は信蕃の安否に重大な関心を置いていた。信蕃が滅亡すれば信濃における徳川方の拠点が失われるばかりでなく、依田信蕃の政治的影響力を通じて徳川方への土豪脅迫を期待していた家康の打撃は、計り知れないものがあつたためである。家康は七月九日に、大久保忠世・大須賀高らの御先手衆の案内者を勤めていた信濃乙骨の土豪乙骨太郎左衛門尉を三沢小屋に派遣し、信蕃に籠城の状況を尋ねた。信蕃は「氏直より人數よせられ候ニより、城者懸敷御座候、其上無勢ニ候之間、城を明被下」と返答し、窮状を訴えるとともに援軍の派遣を要請した（「乙骨太郎左衛門覚書」）。これを受け家康は、御先手衆として派遣してい

た大久保ら七手衆のうち、柴田七九郎康忠に千人を授けて、十二日に三沢小屋へ送った。この援軍に対し信蕃は返礼の使者を送り、「御加勢被下奉事存候、乍去手前之者ともにさへ扶持仕候事不確成候間、爰之御事二御扶持方可被下」と申し入れてきた（同前）。援軍は実現したが、兵糧の欠乏が表面化していたのである。また十四日には、家康は辻盛昌に甲斐地侍十騎を附属させて三沢小屋に派遣した（「諸隊余録」）。援軍を得た後の信蕃は三沢小屋をしばしば下りて各所を攻撃し、北条軍を圧迫した。特に七月月中旬の戦闘は激しく、依田信蕃らは三沢小屋から各地に侵攻し、北条方の諸城を攻撃した。この戦闘で北条方の桜井大膳正が守る加増城や、二俣丹後守の小田井城は、依田軍の猛攻を受けて陥落している（「寛永譜」等）、次いで伴野城を攻撃して、城主伴野刑部を追い込み、宿城に放火するなど、佐久郡の北条方に搔きぶりをかけた。家康は、この結果を受けて依田肥前守信守（信蕃甥）に七月十九日付で感状を与えており（「徳川」三四四ページ）。家康は七月二十六日に、信蕃に謁見、佐久郡を与えることなどを約束した判物を送っており、信蕃の活動に期待を寄せていた（「徳川」三三六ページ）。その後、三沢小屋周辺での合戦については記録が乏しく、七月下旬から八月中旬にかけての動向は不明瞭である。僅かに残されている記録を見ると、八月上旬から中旬にかけて信蕃は大規模な軍事行動を展開したようだ。八月八日に望月城を攻撃して、甲斐衆日向正成が戦功をあげ、大木親忠が戦死したことや（「寛永譜」）、八月十九日には甲斐衆の今井兵部に家康が感状を与えて芦田に入り、二十五日に無事依田信蕃と合流を果たし、その晩から北条軍との合戦を開始した。一日に二三度の合戦があり、その度に双方に死傷者が出ていた（「寛永譜」、「武徳編年集成」等）。依田・甲斐衆

また二十三日には伴野城攻撃にあたつて北条軍と「加奈伊坂」で衝突し、三原に負傷した信濃衆堀入重頼が死去するなどの記事から（「寛永譜」）、三沢小屋に殺到する北条軍を撃退しながら、その間隙を狙つて周辺の北条方城塞に攻撃を仕掛けていた模様である。こうした行動に出られた背景には、既にこのころになると、氏直ら北条軍本隊は甲斐に進出しており、信蕃が三沢小屋に完全に釘付けにされていた状況が緩和され、小諸城の大遠寺政繁と北条方に属していた佐久郡の国人衆のみが相手であったからであろう。信蕃は、八月二十九日に大規模な攻勢を懸け、北条軍と戦つて芳賀四郎右衛門・内田加賀守ら百五十余を討ち取り（「武徳編年集成」等）、次いで相木入道の守る相木城を攻撃して落城させ、関東に逃れようとする相木らを追撃して大打撃を与えた（「寛永譜」等）。奮戦する信蕃に対して家康は、九月八日に兵糧確保のために金四百両を送った。これは現物での補給を実施できない家康が配慮したものであろう。またこの時に信蕃は、使者乙骨太郎左衛門尉に託して大遠寺政繁軍の首帳を家康に進上して戦果を報告した（「乙骨太郎左衛門覚書」）。家康は次第に好転してきた佐久郡での戦線を強化するため、九月二十一日に川原信俊（武田信実の子）・岡部昌綱・今福求助・三井右衛門ら武田遺臣で構成する甲斐衆を依田信蕃のもとに派遣することにした。甲斐衆は武川から台が原を経て、北条軍の占領する七里岩を避けながら諏訪郡柏原に入り、ここから大門峠に入り役行者峠道（役行者越道）を経て芦田に入り、二十五日に無事依田信蕃と合流を果たし、その晩から北条軍との合戦を開始した。一日に二三度の合戦があり、その度に双方に死傷者が出ていた（「寛永譜」、「武徳編年集成」等）。依田・甲斐衆

は三沢小屋防衛だけでなく、各所に進出し、岩村田・岩尾城等を攻撃して北条軍を掃除した（同前）。こうして信蕃は勢力を次第に盛り返すと、家康の命令を受けて佐久郡の諸豪族への工作を進め、九月二十八日には最大の勢力を誇る真田昌幸への接触も試み始めた（『三河物語』等）。これが功を奏すと、信蕃軍は勢いを増し、十月二十一日には望月源五郎が籠もある望月城を甲斐衆横田尹松らが攻撃して陥落させ、ここを引き続き守備した（『寛永譜』『武徳編年集成』等）。このように、北条氏直は本隊の背後である佐久郡を遂に平定できず、むしろ信蕃と家康の敵対によって背後を擾乱され、これが北条軍の勝機を失わせる重要な要因となっていく。

北条軍の甲斐侵入 北条氏直は諏訪頼忠が徳川軍に包围されていることを知ると、これを支援するために八月一日に三沢小屋の包囲を解いて南下し、諏訪郡柏原（梶ヶ原）に進出した。この報告を聞いた徳川軍は、退路を断たれることを恐れて、高島城の包囲を解き、急遽甲斐方面まで撤退し、三日に再度乙骨に押し出して北条軍の動静を探った（『家忠日記』）。しかし、北条軍の先鋒が乙骨に迫っていることを徳川軍は知らずにより、五日になって大久保忠世の家来石上亮角助が物見から引き返してきて、氏直軍四万三千余が一里ほど先に布陣していることを告げたので、諸将は驚き乙骨太郎左衛門を案内者にして確認させたところ、事実であることが判明し、明日にも乙骨に殺到してくることは確実となつた（『三河物語』）。そのため、酒井忠次らは協議の結果、今夜中に小荷駄隊を退却させ、翌日に先手衆を引き揚げさせることにした。六日、北条軍は乙骨に接近し始め、徳川軍は退却を開始しようとしたが、諏訪

頼忠の離反をめぐって遺恨を持つていた大久保忠世が、酒井忠次と口論に及び殿軍の担当を双方が譲らなかつたため退却が遅れ、先手衆の危機感を募らせた。このためその場は諸将が引き取つて、酒井らを退却させ、岡部昌綱が殿軍を勤め、その後大須賀・本多・石川・穴山衆が交互に殿軍にあたつて新府まで撤退した。しかし、酒井忠次は陣払いの際に、陣所に火を放つたため、これを見た北条軍の前進が早くなり、撤退は困難を極め、先手衆は乙骨太郎左衛門の案内で「丸山」に布陣し、前進してくる北条軍に鉄砲を浴びせてこれを阻み、波沢まで後退した（『三河物語』『乙骨太郎左衛門覚書』）。家康は、先手衆の後退を支援するため、甲府から石川数正・曲淵吉景らを新府に派遣し、北条軍に備えさせた。このため、北条軍は若神子まで進出したものの、堅陣を敷く徳川軍のため新府を攻撃することが出来ず、ここに布陣して出方を探つた（『家忠日記』『武徳編年集成』等）。こうして、八日余に及ぶ双方の対峙が始まったのである。

徳川・北条の対峙 北条氏直軍は、若神子を拠点に各地の砦・城館を修築して駐屯し、徳川軍との決戦の機会を窺つた。一方家康は、七月二十四日に武川衆が修築した勝山城（中道町）を扇部半蔵ら伊賀衆に守らせ、中道往還の警固を命じ、雁坂口と甲府周辺を睨む要衝大野砦（山梨市）には松平家清・内藤信成・三枝虎吉らを置き、八代郡小山城（八代町）には鳥居元忠を配備して、若狭路や鎌倉街道への押さえとし、北条軍が甲府へ進撃するルートを遮断するよう布石を打つ（『武徳編年集成』『甲斐国志』等）、八月八日に新府へ入つた（『家忠日記』）。現在明らかにされている、北条氏直方の城館・砦は次の如くである。

北条軍・若神子城（北条氏直本陣）・大豆生田砦・猪子山城（江草小屋）・旭山砦・谷戸城・大坪砦・中丸砦・長坂氏館・中尾堡・中丸砦

これらは何れも『甲斐国志』古跡部等の記述にその根拠をおいている

が、概ね妥当な考證とされ、現在定説となっている。

この他に、これまでの城郭研究において、筈尾星・深沢砦が北条軍によつて使用された

のではないかと考えられている。しかし、この他に史料に登場するが、

どこに比定するかが全く判然としないものもある。例えば、『寛永譜』

等にしばしば見える小尾小屋はどこにあたるのかは明確な指摘はない。

現在、小尾（須玉町小尾）付近に所在が確認されている城郭遺構は、

『和田の烽火台』と『神戸の烽火台』であるが、小尾村に最も近く、信

州峠よりの「和田の烽火台」がそれに相当するのではないかと推定する。

また『乙骨太郎左衛門覚書』に「曲澤玄長と申者の屋敷を氏直より取出

之城二被成候」とあるのは、曲澤氏屋敷（長坂町花水）に相当すると見

られる。このように見てくると、北条軍の城塞は、七里岩台地の周縁部

の要所を押さえる部分にあたつており、いわば台地全体を北条軍が要塞

化するとともに、信州からのルート（小尾街道・佐久往還・林道等）を

全て遮断しており、僅かに諏訪への駿賀往還のみを残していたことがわ

かる。これらの城塞を何時から北条軍が占領し、また構築していくか

についてははつきりしないが、後に見るような激戦地になつた大豆生田

砦は、七里岩台地の北条軍城塞から離れた比較的低地の、徳川軍方面に

突出し孤立して存在している。また、同じく徳川軍の攻撃を受けた曲澤

玄長屋敷も、七里岩台地から花水坂を下りた釜無川沿いの低地に、突出

し孤立して所在しており、これらは七里岩台上に布陣した北条軍が、

徳川方陣地へ迫つて前進した際に構築されたものと見られ、時間的にこの二つの城館は後になって成立していったものと考えられる。

これに対する徳川家康方の城塞を警見しておこう。

徳川軍・新府城（徳川家康本陣）・堂ヶ坂砦（能見城東砦）・能見城・日ノ出砦・鍋山砦（白山城）・中山砦

徳川方が根拠地にした城塞の多くは、北条方と同じく武田氏が築いた

か、その支配下の豪族層が構築したものを利用したものである。このう

ち、徳川軍の重要な防衛線となつたのが、能見城・堂ヶ坂砦である。こ

れは従来武勝頼が新府築城に際して、その防衛のために構築したもの

と考えられてきたが、勝頼時代の施設はさほど大きなものではなく、現

在見られるような遺構は、この合戦の際に家康方によって構築されても

のであるとの見解が出され、現在定説となつてている。『家忠日記』に

よれば、新府を始めとする城郭は、このころ盛んに修築がなされている

ことがわかる。

しかし、徳川方の城普請は、北条軍が甲斐に侵入した翌日から、開始

されていた模様で、「明れハ八月二日、氏直之古府中へ之海道を水堀にほ

りきり、堀之底にやらひを立、上土にしやくの木をたて、猿とりはら・

さいかちはら・からちはらを付、かまいを被成、弓鉄砲者千人御ふ

せ置被成候」『乙骨太郎左衛門覚書』とあるのは、北条軍の前進を阻

み、街道を堀で遮断して土壁を構築するという記述から見て、能見城の

普請の様子を記したものではないかと考えられる。また塙川沿いに構築

された日ノ出砦は、『家忠日記』の八月十一日条に「新府むかいにあら

城普請候」とあるのがそれであると考えられているが、「五日之日ハ

「（高麗）みたうの山を取出之城ニ被成候」、「乙骨太郎左衛門覺書」という記事もあり、皆普請は早くも五日から開始され、「家忠日記」の記載は普請がほぼ完成を見たことを指すのではないかと思われる。日ノ出に對陣が始まった早い段階で、徳川軍が皆普請を実施したのは、先の徳川方城塞を見ればわかるように、堂ヶ坂砦と能見城によつて七里岩台地の前面を封鎖した徳川軍にとって、駿信往還と釜無川沿いには武川衆の籠もある中山砦・鍋山砦（白山城）があつたが、塙川沿いには據点がなく、北条軍にここを回り込まれて、新府の背後を衝かされることを恐れたためであろう。とすれば、地理的に見て日ノ出砦が正対し、睨みをきかせていたのは大豆生田砦であろう。このように見ると、日ノ出砦は北条軍が大豆生田砦を構築したことに対抗したものではないだろうか。<sup>33)</sup>

最後に、釜無川沿いの砦を見ておこう。鍋山砦（白山城）は、「寛永譜」の青木氏系譜に「鍋山砦を守る」とあることなどから、武川衆が守備していたとされ、青木氏の分流山寺氏が籠もつていたと考えられている。この砦は釜無川沿いの城郭の中では構造が最も大きく、戦略拠点として重要視されていたことが推察される。後に中山砦であるが、「甲斐國志」は「ここを武川衆山高・柳沢氏が籠城していた」と記しているが、両氏の本拠地が中山砦の麓にあたることや、佐久郡やその周辺の甲信国境で活動している武川衆の中に、折井・米倉氏らは見えるが、山高・柳沢氏は確認できないので、別隊としてここに籠もっていたのは事実と思われる。両軍は以上のような布陣で八月一日より對峙し、戰局は一時膠着状態となるのである。

北条軍動く 北条方は、戦線が膠着し長期戦となることを恐れ、相模か

らの別働隊を甲斐に引き入れ、家康を挙兵して包囲殲滅する作戦を企図した。家康の軍勢は八千余ともいわれ、北条軍は四万余を擁していたと伝えられ、兵力差は圧倒的であつたが<sup>34)</sup>、新府城を中心に堅固な防衛態勢をとる徳川軍に正面から力押しするにはさすがに躊躇したのである。先に見たように、六月中旬には既に北条氏は、郡内の諸豪族への工作を開始しており、その勢力はこの時期になるとかなり進んでいたと考えられる。郡内の占領には北条氏勝・氏忠らがあつたり、國中への侵攻準備を着々と整えていた<sup>35)</sup>。八月九日、風間係右衛門が率いる北条軍別働隊は、鶴瀬口（初鹿野口）から松平清宗・内藤家長・三枝虎吉らが守る大野砦に夜襲をかけた。鶴瀬口とは笛子峠のことであり、事実とすれば郡内はほぼ全城が北条方に占領されていたものと考えられる。しかし、夜襲は失敗に終わり、北条軍は撃退され、鶴瀬に向かって敗走したが、徳川軍はこれを追撃し、勝沼でこれを捕捉して多数を討ち取った（「諸隊余録」等）。

また十日には、中道往還を國中に抜ける要所迦葉坂を守備していた渡辺因獄助守は、「小田原勢郡内に乱入、且吉田村・西の海村・生死村の一揆蜂起して、小田原勢と合力し、守を討ちとらんと謀するとなり」（「寛永譜」、「渡辺因獄助由緒書」という報告を受け、急ぎ新府の家康に報告した。北条軍と一揆勢は渡辺守の本拠地本楯と、本楯砦を占領した（「大三川記」）。家康は安倍弥一郎を加勢として派遣し、渡辺守（丸尾の誤記であろう）に追い込み、多數を討ち取つてこれを壊滅させた。そのため北条軍も兵を退き、中道往還を奪取して國中の侵攻ル

トを確保し、同時に家康の補給路を断つとした北条氏の目論見は挫折した。なお、渡辺守を攻撃しようと北条方に与した一揆勢とは「西の海」「精進村」等とあるように、小林氏らの西之海衆のことであろうと思われる。この戦闘直後の七月十二日に、渡辺守が家康から与えられた朱印状には、守に附屬させられた者の中に、西之海衆の者の名は一切見られないことからも推測することが出来よう（『寛永譜』）。こうして徳川軍は、補給路や城塞を分断しようとする北条軍を各個撃破して、辛うじて危機を乗り切ったが、本柄合戦の翌十一日に、北条氏直が徳川軍の防備を押し破り、甲府を抜けて郡内へ撤退するという風聞が流れ、家康は防備を固めるよう指示し、今夜の守備が特に重要である旨を下知したという（『三河物語』『三河記』等）。確かに『家忠日記』には、十一日以後、砦の守備が徹夜で実施されるようになったことがわかった。次第に緊迫した情勢であったことが知られる。そして十二日に、郡内を占領し、御坂峠に城普請を実施してここに在陣していた、北条氏勝・氏忠らの北条軍一万余が、御坂を下りて国中に向けて進撃を開始し、氏忠は黒駒に布陣し、北条軍は甲府と善光寺を占領するために侵攻との報告がもたらされた（『武徳編年集成』等）。氏直は甲府留守居衆らの国中の徳川軍が寡兵であることに注目し、「これを撃滅して家康の後方を遮断し、徳川軍を包囲殲滅しようとしたのである。島居元忠・水野勝成らは、大野營を守る松平清宗らの軍勢をあわせて迎撃に向かった。北条軍は兵を各所に出して放火、乱歩を行ない、兵力を分散し備えを乱しており、しかも徳川軍の不意打ちを受けたため大混乱に陥り、まともな戦闘を行えないまま総崩れとなつた（『三河物語』等）。北条氏忠は命からがら御

坂城に逃げ帰り、北条氏政・氏直の意図は「こゝでも挫折し、家康は最大の危機を乗り切つたのである。北条軍の死者は二千六百七十余と記録しているものもあるが、これは誇大にすぎよう。『家忠日記』に「隨一之者三百余騎討取候」、『三河物語』に「雜兵五百余」とあるのが事実であろう。この合戦の模様は、家康も新府から見ていたようで、甲府の方角（うば口とする記録もある）に戦塵があがるのを家康は注視していたと伝える（『朝野旧聞叢書』第一五九）。

徳川軍の反撃 北条軍の攻勢に対して、徳川方も家康の指示により各所に伏兵をおいて物見に来た北条方を討ち取るなどの散発的な抵抗を行っていたが、寡兵という事情から積極的な攻勢に出ることはなかつた。北条軍もしばしば總攻撃をかけようとしたが、全軍の足並みが揃わず、また徳川軍の士気旺盛なのを見て沙汰止みになつていていた（『諸侯余録』等）。そこへ、八月十二日の黒駒合戦で討ち取つた北条方の首級が新府に到着した。家康はこれを敵前に晒すよう命じ、特に目につく物見場を選んで懸け並べた。その顛末を『三河物語』は「敵方は見て何事をするやらん、寄合て走り廻り歩くて見ける處に、頸をかけて立退きければ、敵方急ぎ來りて見て帰り、氏直を申上けるハ、何頸やらん。事々數かけて見へ申と申上ければ、何頸にて有ぞ、見て可參由被仰ければ、各々來りて見て、是ハ我が親是ハ我が兄・甥・従兄弟、是ハ我が伯父・兄弟と申て興をさまし、頸を抱きかゝれて泣叫ぶ、氏直もいよく是に驚き給ひて其儀ならバ無事をつくりて合互に引退けべしとて無事をそつくり給ふ」と記している。家康の晒首による衝撃は凜まじく、北条軍は戦意を次第に喪失し、氏直をして和平へと傾かせる要因に

なつた程であった。このころになると、北条方の中に厭戦が蔓延していたのである。北条氏政が甲州に出陣しない各地の武将に督促の書状を出している（『戦国』二三九三号・二三九五号）。北条方はそれでも徳川方への反乱工作を続け、密かに北条方へつくよう武田遺臣へ廻文を出したが、それらは悉く徳川方に報告され、察知されていた。しかし、中には武川衆中沢健殿右衛門・中沢新兵衛・板垣衆平原宮内等のよう内応しようとする者も出たが、全て露見し処刑され、北条氏政に有利に運ばなかった（『家忠日記追加』等）。特に武川衆中沢健殿右衛門らの内応は、北条軍の軍事行動と連動していた可能性があり、その後に北条軍は花水坂を下りて進出しようとして、これを事前に察知していた

武川衆山高宮内少輔信直・柳沢兵部信俊らが、朝比奈彦右衛門の支援を得てこれを擊破し、北条軍多数を討ち取ったという（同前）。柳沢・山高は中山砦を守備しており、花水坂はそれと指呼の間にあるので、北条軍の目標は中山砦攻略であったのだろう。その後、北条軍は攻勢に出ることなく、新府周辺の徳川方陣地付近で散発的に刈田を実施して、徳川軍を撃退した（『家忠日記』等）。家康はこれに対抗するために、伏兵を各所に置いて北条軍に損害を与える一方で刈田を盛んに行う北条軍の拠点が何處であるかを探らせた。その結果、それが八月二十七日に決して大豆生田砦であることが判明し、家康は翌日これを攻撃することに決めた（『寛永譜』『家忠日記追加』）。二十八日、徳川軍は刈田に出てきた北条軍を伏兵が追い散らしたことを裏腹に、大須賀・酒井・柳原・岡部・菅沼定政軍らが一齊に大豆生田砦に殺到し、猛攻を加えた。北条軍は不意を衝かれたため支えきれず遂に砦は陥落した（同前）。大豆生

田砦は、北条軍陣地よりも遙かに低い微高地に立地し、しかも徳川方陣地に向かって突出していたため、家康が戦略的に最初の標的としたのである。その後、徳川軍は若神子に進出し始め、刈田を実施する記事が現れているのは（『家忠日記』）・大豆生田砦が陥落したことにより、若神子に接近することが可能となつたためであろう。

また、その後の九月七日ころに津金衆が伊賀衆安藤彦四郎・村山武大夫らと協力して、江草小屋（獅子吼城）を攻撃し、これを落城させた（『寛永譜』等）。これを知った北条軍は三千人程が救援に来たが、津金衆小尾監物や伊賀衆が伏兵となつてこれを撃退した。また『武徳編年集成』の八月二十九日条には、この記事の前に「津金（小尾）監物・修理・小池筑前・米倉主計・折居市左衛門等会合群議ヲ凝シ、板橋ノ峠ヲ取敷上道十五里敵地ノ勝間ガ反ニ砦ヲ設ケ交代メ守衛シ佐久郡一揆ノ城砦ヲ抜ベキ旨註進ス」との記事を載せており、「甲斐国志」はこれを江草小屋陥落後の動向と推定しており、事態の推移を見ればそれが妥当であろう。津金・武川衆と伊賀衆は山岳地帯を抜けて北条軍の背後に廻り、江草小屋を落として佐久郡に侵攻しようとしたと目論んだのである。（二）に見える「勝間ガ反ニ砦」とあるのは、「勝間反ノ砦」則ち福荷山砦（白田町白田福荷山）のこと（<sup>24</sup>）、また「板橋ノ峠ヲ取敷」とある板橋とは、南佐久郡南牧村板橋のことであろうと見られる（<sup>25</sup>）。則ち、武川衆・津金衆らの軍事行動は、信州峠を抜ける小尾街道（穂坂路）を掌握してここに拠点を設け、佐久往還を封鎖し、北条軍の補給路を遮断するとともに、佐久で孤立する依田信蕃支援であったと見られる。勝間反ノ砦等はその拠点設置を狙つたものであろうし、三枝平右衛門昌吉が修築した

との伝承を持つ佐久郡高野城（佐久郡高野町）などもそうした作戦の一環と思われる。事実、三枝昌吉・小尾監物らはその後依田信蕃と合流し、岩崎（白田町）で北条軍と戦闘を繰り広げ、十一月七日に伴野信守・貞長父子の守る前山城を攻撃してこれを陥落させている（『武徳編年集成』等）。さらに、九月二十九日には徳川軍は昇仙峠に所在する御獄小屋から別働隊を派遣し、密かに山岳路を抜けて小尾小屋を攻撃し、これを陥落させた（「乙骨太郎左衛門覚書」）<sup>10</sup>。小尾街道（鶴坂路）を占領した徳川軍は、次いで佐久往還を次第に封鎖したため、北条軍は守勢に立たされていった。

また十月十日には、徳川軍は花水坂下に突出して構築されていた曲淵屋敷を夜襲した。「乙骨太郎左衛門覚書」には「十月十日之晩、曲淵玄長と申者之屋敷を氏直より取出之城ニ被成候所ヲ御所様より人數遣し被成候、則案内者太郎左衛門仕候、其時北之かたより人数を引まわし是も打おとし申候、其時彦太郎首告ツ取申候、惣而其時の首級三百実換ハ同所也、其時之案内太郎左衛門仕候」とある。なお、同二十日に小池筑前守が武川衆十二騎に、家康から授けられた三千人を率いて攻撃し、落城させた「釜無の小屋」とは、あるいはこの曲淵屋敷を指すのではなかろうか。以上のように見えてくると、家康の作戦は、北条軍の七里岩台地城塞群より突出した城砦や山岳地帯の砦・小屋等の周縁部に攻撃を集中させ、北条軍に圧迫を加えていたことがよくわかる。四万余とも噂された北条軍は、大軍にもかかわらず、少數ながら地の利を得て地域を知悉し、勇猛な武田道臣を擁した徳川軍によって次第に戦局は守勢に立たされていったのである。

## 六、家康窮地を脱す

駿河・伊豆での衝突 甲斐で両軍の対陣が続いているころ、駿河・伊豆の防衛ラインでも戦闘が起こった。八月十四日、沼津三枚橋城にいた本多重次・向井正綱は、海路を進んで伊豆国網代城を攻撃した<sup>11</sup>（『寛永譜』等）。向井正綱は武田氏海賊衆であり、徳川軍は海賊衆を掌握して海から伊豆沿岸を攻撃することで、対峙する北条軍の後方を擾乱しようとしたのであろう。家康は黒騎合戦終了後、服部半蔵らを伊豆に移して守備を固めさせたが、九月十五日に半蔵ら伊賀衆が伊豆国田方郡佐野小屋（三島市佐野）を攻撃し、これを三枚橋城の松平康親、興國寺城の牧野康成らが支援して遂に陥落させた（『諸侯余録』）。またこれより先に徳川軍は、伊豆国征宇砦（大平城）に進出してこれを修築し、興國寺城より牧野康成・久野宗能が移つて北条軍の押さえとした（『諸侯余録』等）。このように当初、この方面では徳川軍が積極的な攻勢に出ていた。北条軍としては、伊豆・駿河での徳川軍の攻勢が活発になれば、甲斐に侵攻していた都留郡の北条氏忠・氏勝らの退路が断たれ、情勢が不利に傾くことを懸念できず、二十五日に北条氏政は三島に軍勢を差し向けて、三枚橋城・戸倉城・興國寺城を攻撃して駿河の防衛線を壊滅させることを企図した。これが突破出来れば、駿東郡を支配下におさめ、家康を甲斐に封じ込めて包囲撲滅することが可能となる。丁度、この日は福松（徳川忠吉）が三河国東条城から三枚橋城に入ったところであったが、徳川軍は北条軍が進撃して來ることを知ると、三島へ進出した北条軍を迎撃するために出陣した。この合戦で徳川軍は北条軍の三枚橋城攻撃の

意図を押され、山中城へ後退させたものの、小笠原丹波守安次らが戦死する損害を受けた。また葦山城の北条軍もしばしば進出して、戸倉城や三枚橋城を攻撃し、本多重次らは籠城してこれを防いだ。本多重次は戸倉城の岡田竹右衛門（松平康親家臣）が防戦しているのを支援するため、城を出てこれを擊破し、逃亡する北条軍を追撃して葦山城に迫り、服部半蔵らは葦山周辺の刈田を実施して引き揚げた（『寛永譜』『武徳大成記』等）。以後、北条軍は徳川の駿河防衛線を攻撃することはなく、また徳川方も三島合戦での損害を教訓にしたためか、城を出て北条方に合戦を挑むことはなかった。両軍はここでも決定的勝利を得られず、戦線は膠着状態となつた。しかし双方が慎重に対応したことにより、家康の補給ルートは幸うじて確保される結果となつたのである。

眞田昌幸の去就 三沢小屋で奮闘を続け、各所に出撃して北条方を脅かし「氏政（氏直の諱記）へ関東ヨリノウン贈ノ兵糧人數馬ヲ葦田小屋ヨリ討取、氏政ヘノ陣ノ統ケナリカタク候」（『依田記』）といふ状況に追い込んでいた依田信蕃は、家康の命を受けて、上田に布陣する眞田昌幸を徳川方に引き込む工作を本格的に展開した。「眞田ヲサヘ引付、味方へ仕候ヘハ残ル侍トモ手ニタツ儀ニテ無御座候」（同前）といふのは、當時の衆目の一致した見方であつたようである。佐久郡平定と北条方の壊滅は眞田昌幸の帰趨にかかつた。信蕃は眞田方へ密書を遣わし、家老を送つて申し入れたところ、昌幸からの返事も届いたため、信蕃はさらに依田十郎右衛門を派遣して和談の条件を話し合わせた。そして三度目には昌幸自身が密かに三沢小屋の魔に出向き、信蕃と対面して家康へ起請文を提出することを決意したという。昌幸はその代わりに家康か

らも起請文を受け取ることを要請し、信蕃は昌幸の起請文を新府の家康に届け、家康の起請文を得て、これに信蕃自身の起請文を添えて昌幸に送つた（『依田記』）。こうして、眞田昌幸の徳川帰属が濃厚になつた。しかし、昌幸説得工作には信蕃だけではなく、三沢小屋に加勢に来ていました曾根昌世や昌幸の実弟加津野驥岐守信尹らも奔走していたようで、九月二十八日付の加津野信尹宛の家康書状や大久保忠泰書状等によつてその事情が知られる（『徳川』三七八ページ）。こうして徳川方に転じた眞田昌幸は、兵糧が欠乏し、牛馬を食用にして糊口を凌いでいた三沢小屋に兵糧を運び込み、信蕃の危機を救つた（『三河物語』）。昌幸は十月下旬にも、三沢小屋が兵糧欠乏のため苦しんでいたのを知り、籠城していた甲斐衆横田伊松らに兵糧を送つて（『寛永譜』等）。昌幸の徳川帰属は佐久郡の情勢と、徳川・北条の力闘係を逆転させる契機となつた。これまで信蕃は北条方の兵糧運送や兵馬の南下を奪取するゲリラ戦を各所で散発的に実施していたが、信蕃は昌幸とともに碓井村に布陣し、関東から佐久を抜けて甲斐へ至る北条軍の補給線を完全に封鎖したのである（『三河物語』『朝野旧聞叢書』等）。北条氏直は、十月二十五日に上野国の部将で、北条氏邦家臣の猪俣能登守邦憲を、佐久郡内山城に移動させて、補給路を確保しようとしたが（『岩田文書』）、もはや退勢を挽回することはできなかつた。北条軍は、甲斐・駿河方面で徳川軍の補給路を封鎖し、包囲殲滅しようと試みて失敗したが、眞田昌幸・依田信蕃の連合により、逆に氏直本隊が甲斐で封鎖・孤立するに至つたのである。昌幸の帰趨が、北条軍の勝機を最終的に奪つたといえよう。

徳川・北条同盟の成立 戰局が徳川軍の有利に展開し始めるべく、次第に

家康に結集する武田遺臣が増加したようで、家康の知行安堵状や宛行状

脱したのである。

は八月に入つて急増し、特に黒駒合戦勝利後は飛躍的にその発給量が増えてゐるのは、それを示すものである。補給路を依田信蕃・真田昌幸や

甲斐衆に封領された北条軍は、勝機を逸して次第に戦意を失い、遂に織田信雄の勧めもあって和睦することにした。十一月二十七日に、北条氏直は北条氏規を通じて家康に和睦を申し入れてきた。その際に提示された条件は、上野国を北条氏に割譲する代價として、北条方は占領していた郡留郡と佐久郡を徳川方に引き渡すことや、北条氏直の正室に家康の息女（曾姫）を迎えて婚姻関係を取り結ぶというものであつた（『家忠日記』他）。家康はこれを了承し、二十九日に北条軍の撤退が開始された。その際に北条軍が旭山砦を修築したため、家康は激怒し朝比奈泰勝をして氏直を詰問したところ、氏直は北条氏規を派遣して陳謝し、人質として大道寺直政・山角上野介を差し出したため、家康もこれを了承し、酒井家次を人質として北条軍撤退の安全を保証した（『武徳編年集成』等）。井伊直政の徳川・北条両氏和睦覚書によれば、家康は北条氏政の起請文や佐竹・結城・皆川氏ら関東の諸大名と連絡を取れるように飛脚の自由通行等を要求している（『徳川』八七一ページ）。こうして、両者の和睦が成立すると、家康は甲斐・信濃仕置に着手し、本格的に武田遺臣の従属や知行宛行・安堵を実施するとともに、右左口砦・勝山砦等の修築を命じ、甲斐の防衛力強化に勤めている。また、講和が成立したとはいえ、佐久・諏訪郡ではまだ反徳川勢力が健在であったため、天正十年から十一年までその掃討戦が続き、しかも上杉景勝との新たな対立が始まるなど緊張状態が続いた。しかし、寡兵の家康はこうして危機を

### 天正壬午の乱の史的意義—むそびにかえて—

以上のように、徳川・北条両氏の対決の様相を見てくると、この対決が家康に有利に推移したのは、まず第一に彼が信長存命中より武田遺臣を密かに匿うなどその結集工作を行い、甲斐侵攻後はそれをよりいつそう大規模に押し進めたことが大きい。特に甲斐では武川衆などの領主連合をいち早く味方につけ、国衆が壊滅し核を失つていた土豪層の結集を容易にしようと計ったことが、北条氏を後手に廻すことによる結果だ。彼らはこの合戦で徳川軍を支え、実はその本隊よりも大きな役割を果たしていた。この合戦は徳川対北条よりも、むしろ武田遺臣対北条という性格が強く見えるのもそのためである。また、この過程で獲得した武田遺臣が、その後甲州系家臣として江戸幕府成立後も徳川氏の政治・経済・軍事編成において大きな役割を果たしていくのである<sup>12)</sup>。特に天正十二年の小牧・長久手の合戦において、羽柴秀吉と対抗する軍事力は、武田旧臣に負うところが大きかったとされるように、天正壬午の亂に伴う旧武田領経略は、家康の政治・軍事的地位を飛躍的に高める意義を持つのである。小牧・長久手で家康を屈服できなかつたことは、秀吉の政治路線にとつて大きな打撃となり、後に家康が豊臣政権で重きをなす契機ともなつた。

次に、この乱により東国では徳川・北条・上杉の三者鼎立という状況が現出することになつたが、そのうち徳川・北条同盟の成立と、その後の家康の小県・更級・埴科郡への経略と、北条軍の上野国進出は、上杉

景勝を圧迫した。そこで上杉は羽柴秀吉と同盟を結んで西国の羽柴（豊臣）政権との連携を深めることでこれに対抗したため、これまで東国の大名間の対立局面であつた様相が、俄に織田政権を継承する羽柴（豊臣）政権をも含んだ天下統一をかけた争乱へとその性格を変化させる契機となつたのである。しかも、羽柴（豊臣）政権と上杉領に挟まれた五力国大名徳川家康は、その圧力と対抗することが不利であることを悟り、天正十四年大坂城に参上して臣従の意志を明らかにし、秀吉政権に連なり豊臣大名への道を選択した。こうして天下の趨勢はもはや豊臣秀吉による統一へと大きく傾斜することになった。しかし、北条氏政・氏直はこの形勢を等閑視し、遂に滅亡の道を歩むことになる。壬午の乱は、西国の一政権を呼び込むきっかけともなり、これが天下統一を大きく前進させることになる。つまり三者鼎立という地域的統合の実現が、天下統一を結果的に早めたのである。

最後に、壬午の乱では「一人勝ち」ともいふべき利益を獲得したのは、真田昌幸であった。昌幸は北条・徳川間にあつて自己の領域拡大と権益確保に動き、遂に家康のもとで上田・真田といった信州の旧領を始め、上野国沼田領等を確保し始めたのであった。しかし、徳川・北条同盟の成立に際しての条件が、上野国と信濃佐久郡・甲斐都留郡の交換という領土分割協定であったため、昌幸は上野国の自領の確保に飽くまで固執し、遂に家康から離反して上杉景勝につき、次いで景勝の背後にいた秀吉の支援を受けてこれに対抗した。その後、秀吉は景勝・昌幸に命じて、昌幸を家康の寄騎として問題を決着させ、ここに真田氏は領土確保に成功したのである。そして沼田領問題は、北条・徳川間で内

済する方向をとりつつも、秀吉の裁定というところで決着をつけようとしている。だがこの解決が長引き、北条軍の真田領名胡桃城攻撃が引き金となつて、秀吉は小原出兵を布告するのである。天正壬午の乱を契機とした問題が、秀吉の天下統一まで燃り続け、東国の政治・軍事局面を最後まで規定し続けたのである。このように、真田昌幸の動向が、東国の政治状況を不安定なものとし、果ては豊臣秀吉の介入を招き、北条氏政・氏直にとつては命取りとなつたのである。

以上のように、天正壬午の乱は、単なる東国の局地的戦乱ではなく、天下統一に至る政治・軍事局面を規定し続けた画期的な事件であり、また徳川家康は豊臣政権において重きをなす地位に押し上げる背景ともなつたのである。

### 注

(1) 天正壬午の乱に関する研究は以外に少なく、その甲州局面については、わずかに田代孝「天正壬午の戦い」（『日本城郭大系』8長野・山梨所収）、山下孝司「天正壬午の戦いと甲斐国内の山城」（『定本山梨の城』）などのコラムがあるに過ぎず、未検討の課題が多い。なお

本稿は、政治・軍事史に視点を絞つたため、家康の領国支配の形成と展開については、十分な検討ができなかつた。この点については後日を期したいと思う。なおこれについては、伊東多三郎「所謂兵農分離の実証的研究」（『近世史の研究』四巻所収）に分析がある。

(2) 本稿では出典はカッコ内で示したが、その典拠としたものを掲げておく。中村孝也著『徳川家康文書の研究』上巻（『徳川』と略記）、

徳川義宣著『新修徳川家康文書の研究』（「新徳川」と略記）、荻野三七彦・柴辻俊六編『新編甲州古文書』（「甲州」と略記）、杉山博・下山治久編『戦国遺文後北条氏編』第三巻（「戦国」と略記）、「信長公記」、「家忠日記」、「三河物語」、「信濃史料」十五巻、補遺編上巻、「新編信濃史料叢書」、「上杉家譜年譜景勝公」、「武徳編年集成」、「寛永諸家系図伝」（「寛永譜」と略記）、「諸侯余録」上下（内閣文庫影印本）、「甲乱記」（「武田史料集」収録）、「甲斐国志」、「朝野旧聞叢書」（内閣文庫史料叢刊）、「乙骨太郎左衛門覚書」（内閣文庫所蔵）。

(3) 下山治久「小田原合戦」（一九九六年）に詳しい。

(4) 家康が伊賀越えの最中に、武田遺臣への工作を早くも開始していることは、後述する依田信蕃の例でも知られる。信蕃は甲斐への潜入を伊賀の家康から指示されている（「依田記」等）。

(5) 一説には名倉喜八郎とともに派遣されたといふ。また、本多の甲府派遣は六月十日説（「武徳編年集成」）、十四日説（「大三川記」）があるが、ここでは「家忠日記追加」の七日説を採用した。

(6) 河尻秀隆が本多助を暗殺したのは「甲陽ノ国人今般神君ノ両使（本多・名倉のこと）ハ川尻前守ヲスベキ旨國中へ下知スベキアト称スル」（「武徳編年集成」）という風聞のためで、秀隆は六月十四日に就寝中の本多らを暗殺したといふ。しかし、本多助暗殺が秀隆に対する甲斐国人の蜂起を引き起す契機となつた。同書によれば「甲陽ノ国人競ヒ起り川尻肥前守ガ神君ニ敵對スルノ罪ヲ称シ」て河尻屋敷を攻め、山県昌景の旧臣三井弥一郎が秀隆を討ち取つたといふ（河尻暗殺）。

は六月十八日が正しい）。この記事には誇張があるものの、甲斐国人は秀隆が徳川氏との協調を続ける限りでは表面上平穏であったが、反徳川連署で、森田助之丞に知行安堵状を発給しており、これが徳川氏の甲斐支配文書の初見となる。これは秀隆暗殺の前日に家康が甲斐支配の主導権確保を開始したことを如実に示し（秀隆の甲斐国人・土豪層への知行安堵状は一点も確認されていない。なお既に六月十五日付米山囚獄助死の岡部昌綱・曾根昌世連署証文もあるが、米山氏の甲斐在国が確認できないので、産田宛を初見としておく。）、秀隆が本多暗殺を決意した風聞もあながち無根ではなかったのであろう。このように見ると、先の大山衆の機柔が本能寺の変直後になさいたこと等と併せて考えれば、家康の甲斐国人・土豪層への工作はかなり進んでいたものと見られ、本多暗殺は甲斐国の主導権を家康に奪取されることを恐れた秀隆が巻き返しを謀った政変劇と考えられる。しかしこれは逆に秀隆にとつては命取りになり、東国における旧織田勢力は彼の死によって完全に崩壊した。

(7) 佐藤八郎「武田信玄とその周辺」。

(8) 「依田記」によれば依田信蕃は田中城を家康に引き渡した後、家康から家臣になるよう勧説があつたが、勝頼の安否が判明しないうちにはえられないとして、三月十四日小諸に帰還した。その後、織田信忠のもとへ出仕しようとしたが、家康からの使者に合い、信長より処刑すべき武田家臣の書立の「一ノ筆」に挙がっていることを知られ、急速

甲斐国市川の家康陣所を秘かに訪問したところ、遠江国小川への逃亡を勧められたという。信蕃は主従六人でここに潜行し、本能寺の変直後に伊賀越えの最中の家康より書状を受け取り、急遽甲斐へ出立したとある。このように家康は、伊賀越えという艱難に際会しながらも、その最中に各所へ使者を派遣していたことが知られる。

(9) 「小沼」はもと『和名抄』に出てくる「小沼郷」に属していたと考えられる一帯の広域呼称で、「小沼」という名の村は中近世には存在しない。「小沼」は御代田町周辺といわれるが、これは甲信国境とはとてもいえず、誤記であろう。ただ佐久郡小沼小屋という記述が正しいとすれば、小田井城・金井城を中心とする周辺の城館を指すのであろうか。あるいは、甲信国境の記述が正しく、小屋の地名が誤記であるとすれば、海尻城・海の口城などがそれにあたるであろうか。

(10) 大井撰元が拠っていた甲斐奈神社は、甲斐国の大井社という地位に加えて、その神社は土塁に囲まれた土塁敷の様相を示しており(筑前原跡)、これは戦国期の城館跡と考えられている(『日本城郭大系』8長野・山梨)。なお大井撰元がこれを拠点に北条方についたことは、『甲斐国志』が伝えるところであるが、これについては午八月晦日付傳川家康行人連署証文に「標立之補宣」が「今般逆心二付而御成敗候」とあるので事実と確認できる(『山梨岡神社文書』『甲州』七五二号)。

(11) 「松濤棹筆」(『新徳川』七二一ページ)。  
(12) 「静岡県の中世城館跡」一九八一。

(13) 下条兵庫助頼安は、武田氏の一族下条信氏の子である。下条信氏と兵庫助信昌は、天正十年二月に織田信忠軍を迎撃するため、滝沢要害

に籠もり、この切所に拠つて織田軍を食い止めようとしたが(『信長公記』)、家臣下条九兵衛らの反乱により追放され(『甲乱記』)、その後戦死したという。そのため、下条氏は信昌の弟頼安が相続していた。

(14) 家康が本陣としていた甲府尊林寺に、武田遺臣の一団が乱入して家康暗殺を企図したが、近習衆を數人殺傷しただけで目的を果たせず、擊退されたという逸話が残されているが(『甲斐国寺社由緒書』等、なおこの逸話は有名で三田村鳶魚などが詳細に紹介している)。『三田村鳶魚全集』(一巻参照)、これは史料的に他の裏付けがとれないで信憑性に疑問が残るが、こうした逸話は甲斐平定が從来いわれているように、決して家康に有利で坦々たるものではなく、現実には厳しい政治的駆け引きと北条軍との対決を通じて徐々に達成されていったことを物語るのではないだろうか。

(15) 「乙骨太郎左衛門覚書」によれば、太郎左衛門は酒忠次の使者として日に三度高島城に赴き、頼忠へ降伏を進めたが、頼忠は二度までは返事を忠次に寄越したが、三度目に應答すると見せかけて太郎左衛門を暗殺しようとして謀った。これには諭訪方にいた「御内之衆」が「貴殿をたばかり打へき支度候間、急のけよ」と知られたため高島城を脱出したという。

(16) 「日本城郭体系8長野・山梨県」、『定本山梨県の城』。

(17) 山下孝司「中世甲斐国における城郭の歴史的立地—能見城防壁を例として—」(『戦国大名武田氏』所収、一九九一年)。

(18) 大豆生田砦のある大豆生田は、藤卷伊予守屋敷が所住していたと伝えられる(『甲斐国志』)。藤卷氏は北条氏に属して合戦しており、

藤巻一族に発給された北条氏朱印状が幾つか知られている。北条軍がここに砦を築いたのは、塙川沿いの攻撃拠点を確保する意図もさることながら、従属していた藤巻氏の本拠地であつたことも場所選定の理由になつていたのではないだろうか。特に土豪層の屋敷を始めとする施設を利用して、砦や城館とすることは、先に氏直が曲潤屋敷を砦にした事実とあわせて十分考えられる。

(19) 双方に兵力の圧倒的差があることは、当事者間でも十分意識されていた。北条氏家臣高城胤辰は兵力差が明らかであるので勝利は目前であると某氏宛の書状で述べている(『甲斐国志』卷二二所収)。

(20) 北条軍は御坂峠に城普請を実施しており、御坂峠は北条氏政の書状に「就中御坂普請出来之上、仕置已下、委細左衛門佐二申付候」(『戦国遺文後北条氏編』二四三九号)とあるように、ここを拠点に徳川軍と睨み合っていた。ただその完成時期は明らかではない。

(21) 西之海衆については上野晴朗(甲斐武田氏)参照。  
(22) 平岩親吉が伏兵を山下において敵を七人討ち取るなど、こうした事例は数多く見受けられ(『武徳編年集成』等)、「家忠日記」にも伏兵の記事が見られる。

(23) 「日本城郭大系8長野・山梨県」。

(24) 板橋周辺には、現在のところ城郭遺構は確認されていない。

(25) 「日本城郭大系8長野・山梨県」。

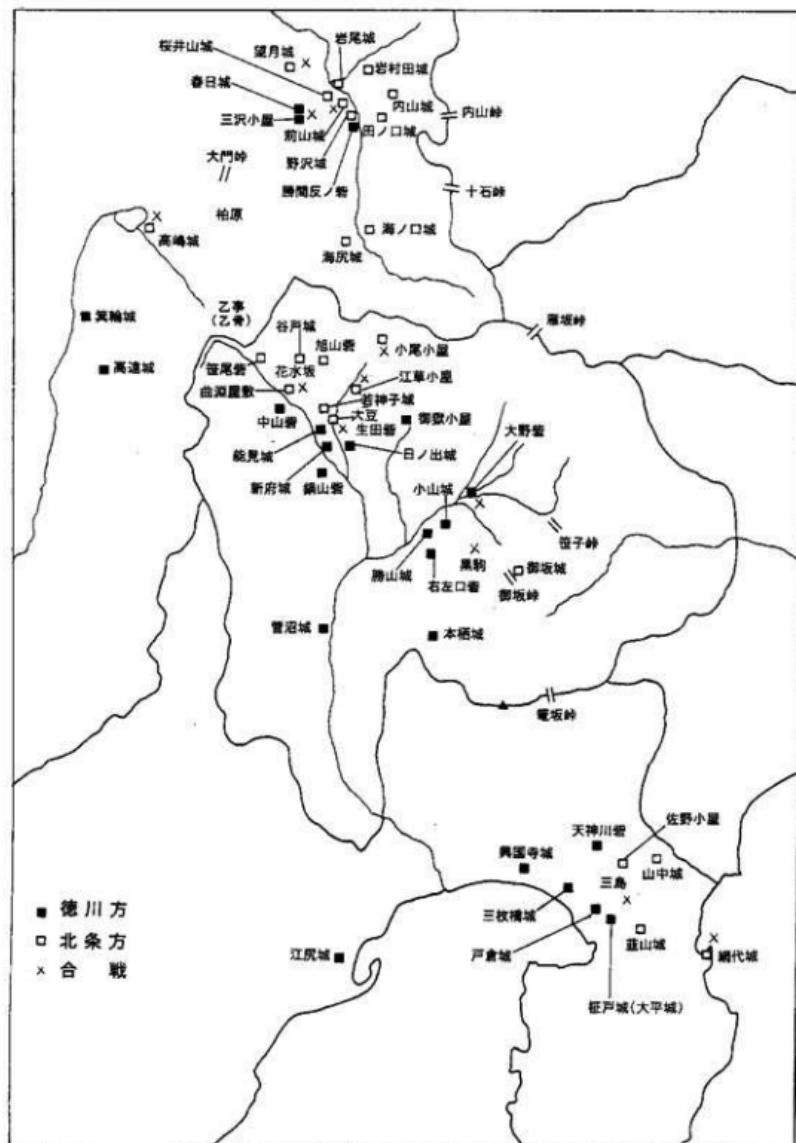
(26) 家康はその後、北条軍が徳川方と同様の作戦をとつて御獄小屋を攻撃し、背後に廻ることを恐れてか、十月一日に徳川軍の各部隊より鉄砲衆を一人づつ徵發して御獄小屋に入れ(『家忠日記』)、酒井忠次・

知久頼氏らを守備につかせている(『寛永諸』等)。家康がこのように重臣層を御獄小屋に入れたのは、これが山岳ルートを経て双方が背後に進出できる要衝であることを、江草・小尾小屋攻撃により認識したためであろう。

(27) この戦闘は、七月十四日付の本多重次宛の阿部正勝・本多正信・大久保忠麟書状に「むかひ殿御高名不及申候」「在々御放火、殊足城押破、各御高名不申中、各海賊衆情被入由候」とあるので、事実と確認できる(『徳川』八六九ページ)。なお『大三川記』にはこの時の攻撃を記す(『戦国遺文後北条氏編』二四三九号)。

(28) 中村孝也「家康の臣僚—武将編」、「家康の政治経済臣僚」、島正元「江戸幕府の権力構造」、村上直「武田氏家臣團の系譜」(『武田氏研究』創刊号、一九八八年)等。

(29) 北条氏政・氏直が西国の政治状況に疎く、豊臣政権の実力を見くびり、自己の実力を過信していた様相については、下山氏前掲書に詳しい。



第9図 天正壬午の乱関連城郭と地域概況図（一部推定を含む）

## 第六章　ま　と　め

今回の調査では帝都の一部と思われる遺構が発見・検出され、調査面積一五〇〇m<sup>2</sup>と比較的小規模な発掘ではあったが、これまで実態が不明であつた能見城防壁遺構の一端が明らかにされたことは大きな成果であつたと言うことができる。

能見城跡は乱開発により階段状に山が造成されてしまったことは先に述べたとおりであるが、この度の測量は造成箇所を含め能見城城山ほぼ全域に実施され、これにより遺構の現状を正確に把握することができるに至つた。城郭全体のなかでの発掘調査箇所の位置付けは勿論のこと、今後の城郭研究や地域の文化財保護に、測量成果の図面が有意義に活用されることは間違いないことであろう。

能見城にかかる歴史的な背景等に関しては、平山優氏によつて文献史料を駆使して詳細な考察がなされた。平山氏は天正壬午の戦い（天正壬午の乱）の時間的経過と広がりを丹念に追い、武田遺臣を積極的に登用した徳川家康の勝因を探つてゐる。さらにその結果としてあらわれた東国における権力構造の変化に言及して、それが豊臣秀吉による天下統一事業の東国への進展のひとつと見なされたという見通しを示し、天正壬午の戦い（天正壬午の乱）が甲斐国内のみでの局地的な戦闘を終始していたのではなく、天下統一を規定した画期的な事柄であつたと位置付けた。本論稿は、能見城防壁の築造にかかる天正壬午の戦い（天正壬午の乱）が、戦国時代末期から天下統一という移行期のエポックであつたことを呈示している。

新府城跡という武田氏最末期の大規模な城郭の影に隠れ、話題にのぼる時には、開発による城郭の破壊例として引き合いに出されることが多く、どちらかというと負の印象でとらえられていた能見城跡ではあったが、今回の調査ならびに報告によつて、その印象は変えられ新府城跡とのかかわりなどにおいて、戦国時代最末期、中世から近世にかけての貴重な遺跡であることがより深く理解されるようになった、と言つてよい。

### おわりに

能見城跡の調査によつてもたらされた資料は、歴史の解明に資するもので貴重であり、文化財として後世に永く伝えていかなければならぬ。しかしながら本報告は限られた作業の中で行われたもので、不行き届きであることは否めない。多々不充分な点もあると思われるが、本報告書が城郭研究、地域史研究、中世・近世史研究や調査等に活用されれば望外の喜びである。

最後に、文化財保護の趣旨について御理解を示し、能見城跡の発掘調査並びに測量に関して快諾を頂き、多大な御協力を賜つた東京電力株式会社山梨支店に感謝申し上げたい。

# 写 真 図 版



図版 1



調査前風景



作業風景

図版 2



測量風景



発掘風景

図版 3

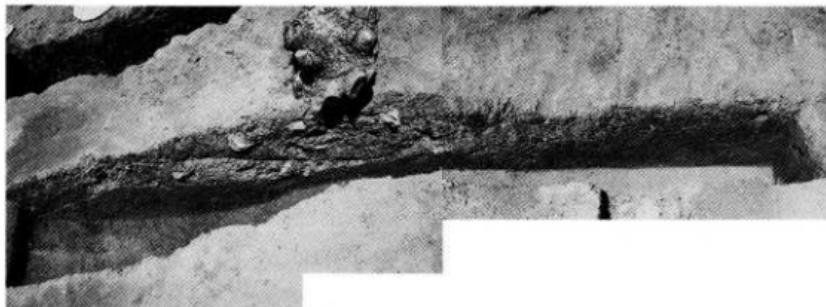


上段テラス（部分）



下段テラス

図版 4



上段テラスB-B' 土層



下段テラスA-A' 土層



下段テラスC-C' 土層

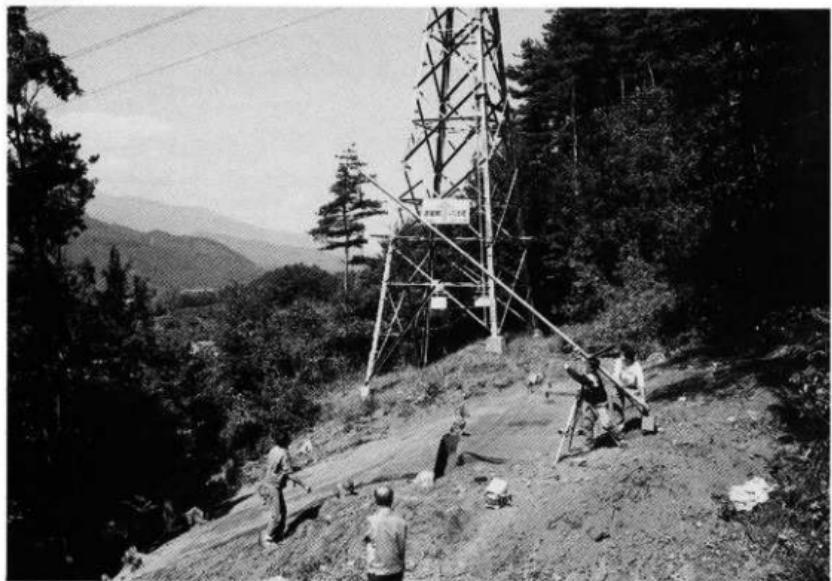


下段テラスB-B' 土層



下段テラス つぶて石(?)

図版 5

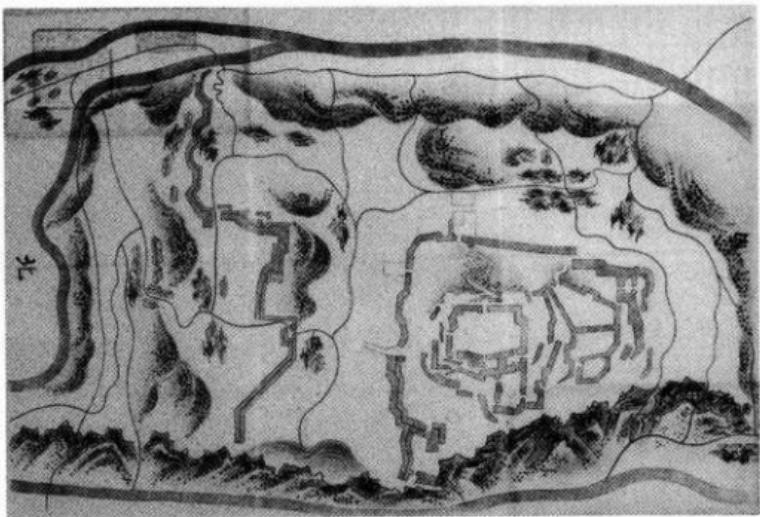


写真測量風景



下段テラス（帯郭）

図版 6



諸国古城之図・新府城跡（広島市立中央図書館）



能見城跡空中写真（1948年3月31日撮影）

---

## 能見城跡

送電線鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 平成10年(1998年)6月30日

編集・発行 茅崎市教育委員会  
茅崎市遺跡調査会

〒407-8501  
山梨県茅崎市水神一丁目3番1号  
TEL 0551-22-1111(代)

印刷 有限会社 タクト/印刷・デザイン

---

# 能見城跡

平成十年六月調製



株式会社バスコ調製

撮影：平成9年9月  
使用図化機：解析図化機ブリニコンC-100

1:1,000  
0 100 200m

伊勢市遺跡調査会

